
バカと紅と召喚獣

アンティークー珈琲店ー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと紅と召喚獣

【Nコード】

N0457W

【作者名】

アンティックー珈琲店ー

【あらすじ】

幼少時代、住んでいた町を引っ越すことになった紅月隼人。そして高校2年の春、引っ越し先から帰ってきた隼人は試験校である文月学園に通うことになる。

しかし、振り分け試験でミスを犯してしまい最低ランクのFクラスに入ることになってしまう！これから隼人はFクラスで楽しい学園生活を送ることができるのか！？

これはバカテスの二次作です、小説書くの初めて&文才無しなので

その辺はご了承ください<>

プロローグ（前書き）

この作品には「残酷描写」「15歳未満の方の閲覧にふさわしくない表現」が含まれています。

15歳未満の方はすぐに移動してください。
苦手な方はご注意ください。

プロローグ

僕こと紅月隼人は悩んでいた、親に聞かされたあることによって・
・

???「隼人君、遊ぼう」

隼人「うん、でもね???ちゃん・・・」

???「どうしたの?」

隼人「実は明日の朝に引越すんだ・・・僕」

???「えっ!?どうして!そんなの嫌だよ!」

隼人「ごめんね、僕も???ちゃんと離れてたくないけど親の都合
でしょうがないんだ」

???「じゃあ、絶対また会える?」

隼人「うん、必ず約束するよ!」

???「絶対だよ!ぜえ~~~~たっいだよ!」

隼人「約束する、また会おうね」

そしてその夜、隼人は家で荷物の片づけをしていた。

隼人「母さん、どうしても行くの？僕嫌だよ！」

今まで過ごしてきた町を引っ越すというのは少なからず寂しいものだ、大切な人とも別れることになるのだから……

母「ごめんね、でもお父さんの仕事の都合でしょうがないの、我慢して頂戴。」

母さんは悲しい顔をしながら僕に言った。こうなったら気持ちを切り替えて引っ越し先での生活を楽しもうじゃないか！

母「でも、必ずこっちにまた帰ってくるとおもうからそれまで向うでの生活を楽しみましょう」

母さんの言う通りクヨクヨしていても何も変わらないのでポジティブに考えよう！

隼人「さて、明日に備えて寝ますかな」

そして僕は布団の中に入った。疲れていたのか10分もしたら熟睡していた……………

プロローグ（後書き）

どうも、作者です！こんな感じで始まるのでよろしくお願いします♪

小説を書くのが初めて＆文才無しなので不快に感じることもあると思います、暖かい目で見守ってくればうれしいです！

感想などあつたらよろしくお願いします^^

俺と始まりと召喚獣（前書き）

どうも、作者です♪最近暑いですねw
バイトとかでいつも汗ダラダラですよくくでも暑さに負けずに頑張
っていきましょう！

では1話目です、どうぞ♪

俺と始まりと召喚獣

桜が咲き誇るこの季節、俺は帰ってきた。今日から文月学園での新しい学校生活が始まる。

ずっとこっちにいなかったから友達とかすぐできるか心配だ。この文月学園は科学とオカルトが融合してできたとても愉快的な学校である。それに試験校なので学費が安い、これなら一人暮らしも大丈夫だろう……たぶん。

隼人「それにしてもこの高校に???は居るかな?居たらうれしんだけどな、そんな都合よくいかないのが現実なのよね。」

この学校は「試験召喚システム」というものがありテストの成績でA〜Fまでクラス分けされており、テストの成績でクラス同士の競争とかをするらしい。

そういえば、振り分け試験の監督の先生が来るとか言ってたな。

隼人「あれかな?たぶんそうだろ。」

こちらに向かって来る人影がある。どんな先生かなと思って見てみるとそこにはチンパンジー?のような人がいた。

隼人「ええ〜と、人ですよね?」

???「貴様、いい度胸だな。」

隼人「すみません・・・、それより監督の先生ですか?」

西村「まあいい。そうだ、俺が振り分け試験の監督の西村だ。」

隼人「紅月隼人です、宜しくつす。」

西村「では、振り分け試験を行うから着いてこい。」

もしかして怪しいところに連れて行かれると思ったがそれはないだろう。チンパンジーの集い場とか。

西村「今何か考えなかったか？」

隼人「滅相も御座いません……。」

なんて考えの鋭いチンパ……先生なんだ！脳の出来がちがうのか？

西村「このテストは問題数無制限なのでいけるとここまで頑張れ。」

隼人「了解……。」

自慢ではないが頭は良いほうなのでたぶんAクラスは入れると思う。
……そうこの時はそう思っていた……。

西村「そこまで！採点をするから少し待っている。」

隼人「了解……。」

テストの出来は完璧、Aクラス入りは間違いないだろう。30分くらいして採点を終えたのか西村先生が難しい顔をしながらこちらに来了。どうしたんだろ？すると西村先生が声をかけてきた。

西村「紅月、よくがんばったな。」

隼人「えっ、ということはAクラスですか？」

やったぜ！Aクラスの設備は豪華ということだから快適に過ごせるなっと思っていると西村先生が続きを話し始めた。

西村「ああ、ちょっとしたミスさえしなければAクラス入りだった。

」

えっ！どんなミスしたんだ？テストの出来は完璧だったはずだけど・
・。。

西村「これを見てもみる。」

渡された用紙を見てもみる。

あっ、名前を解答欄に書いている！！てことはもしかして・
・
もしかすると・
・
・

西村「紅月隼人、『F』クラスだ。」

隼人「俺としたことがあああああああ!!」

魂の叫びをあげながら俺は泣いた・・・

生徒A「なんだ今の声!？」

生徒B「魂の底から出てきたような叫びだな・・・。」

俺と始まりと召喚獣（後書き）

いやあ〜グダグダになってしまいすみません＜＞

でも頑張って書いていこうと思うので応援宜しくお願いします！

主人公設定（前書き）

今回は主人公設定です♪

主人公設定

名前 紅月 隼人 こうつき はやと 16歳

誕生日 11月16日

身長 170cm 体重 55kg

趣味 ゲーム テニス 読書 運動

特技 テニス 料理

好きなもの 動物 物事を一所懸命に頑張る人 ゲーム
嫌いなもの 一所懸命やっている人を馬鹿にする人 蛇（見ただけで気絶する）

容姿 少し眼つきが鋭い イメージとしてはテ。スの王子様の越。
リョーマ

好きな女性のタイプ 一緒にいて楽しい人 貧乳

本作の主人公。眼つきのせいでクールに見られることがあるが実は明るく能天気。

喧嘩は強く自分から暴力を振るうことはないが（明久たちは別）自分の友達や大切な人が傷つけられると容赦なく暴行に走る。

高校生なだけあってエロには興味がある。他にもテニスが好きでよく休日の日にテニスコートに打ちに行っている。体を動かすことが好きでよく怪我をすることがある。引越先では向こうの友人とよくテニスをして遊んでいた。

家族構成は父 母 姉が2人いる。隼人の姉は2人とも海外に留学しており日本にはいない。その姉はパソコンでよく隼人を可愛がったりしており隼人も別に嫌ではない。

学力は 平均600点代だが数学・科学だけは苦手で一桁、二桁である。しかし古典は得意中の得意。

召喚獣

装備はラケット&ボール（球はほぼ無限） 服はテニスのユニフォーム

腕輪の能力 無我の境地

無我の境地

己の限界を超えた者のみが行き着くことができる境地。頭で考えて動くのではなく、身体が実際に体験した記憶で無意識に反応する。今までに対戦してきた相手の技・プレイスタイルが繰り出せる。しかし、本来できないものを限界を超えたところで行うため、その反動として体力を激しく消耗し、一気に身体に襲い掛かる副作用がある。ちなみに、発動すると発生するオーラはイメージ的なものではなく、実際に目に見えるものとされている。

無我の境地の奥には、三つの扉が存在する。

百錬自得の極み

三つの扉のひとつ。無我の境地の爆発的力を片手（別の個所に移動させることも可能）に集めることで、技・回転・球種の威力を倍返しにできる。副作用の疲労を最小限に抑えられる。パワーを集中させた部位以外がおろそかになるという欠点がある。

才気煥発の極み

三つの扉のひとつ。頭脳活性化型の無我の境地。一球ごとの戦略パ

ターンを瞬時にシミュレートし、最短何球目でポイントが決まるかを見極めることができる。その正確性から「絶対予告」と呼ばれる。ただし、実力が上位の者と対戦した場合は予告が外れることもある。（これはあまり使わないと思いますw）

天衣無縫の極み

三つの扉のひとつ。無我の奥にある最後の開かずの扉。無我の力を体内にためこみ、何らかの形で体の必要なところに放出して増幅させる技。百錬自得の極みを適材適所に移動させた進化版と考えられている。

上記wiki参照

主人公設定（後書き）

すみませんが腕輪の能力を変更させてもらいましたw
ちよっとこっちのほうがいいかなと思いましたので<
>

俺とFクラスと試召戦争 前編（前書き）

今日は学校で強制労働させられましたくゝほんと勘弁してほしいです！

では2話目ですゝどうぞ！

俺とFクラスと試召戦争 前編

俺はFクラス担当の福原先生についていきFクラスの前にいた。中に入ってみるとそこには畳・卓袱台・座布団といかにも最低ランクという設備が整っていた。一瞬サザエさんの家でもここまで酷くはないぞと思ってしまった。しかしここで一年すごすのか、大変そうだな。

福原「では、紅月君自己紹介をお願いします」

自己紹介か・・・普通にやればいいだろう

隼人「ええ」と、紅月隼人だ。趣味はテニス、運動、ゲームだ」

今ゲームと言った瞬間目を輝かせてた奴がいたな、そんなにゲームが好きなのか？俺も人のことは言えないが。するとさっきのゲームの奴と隣の奴の話し声が聞こえてきた。

???「明久、ゲームという単語にすぐ反応するな、だからまともな生活ができないんだ。」

明久「なんだと雄二！食費を削ってまでもやり遂げる価値があるゲームをすることの何がわるいのさ！」

雄二「その分生活に困っているだろうが!!」

俺も生活費を削ってまでゲームをしようとは思わないな。明久とかいうやつは勇者だな。

隼人「テニスが好きだからよかったら一緒にやろう。一年間よろしく！」

二人の口論がヒートアップしてきたので先生が注意しようとして教卓を叩くとその瞬間、教卓が崩れた。

どんなけボロいんだよ！？さすがFクラスだな。

福原「替えの教卓を用意してくるので皆さんは自習しててくださいい」

そして先生が教室を出ていくとさっきの2人が話しかけてきた。ちなみにおれの席はさっきの雄二と呼ばれていたやつ隣の隣だ。

雄二「俺の名前は坂本雄二。一応このクラスの代表だ。呼び方は坂本でも代表でも好きに読んでくれていい。」

隼人「ああ、俺はさっき自己紹介したとおり紅月隼人だ。よろしく雄二」

明久「僕は吉井『お前は喋るな、バカがうつるだろうが』明って何を言っんだ雄二！それだと僕がバカみたいじゃないか！！」

雄二「じゃ、三角形の面積の公式を言ってみろ」

これくらい誰でもできる。明久もそこまでバカではないだろ……

明久「底辺×高さ！あんまり僕をバカにしないでよね！」

雄二「よし、最後に2で割れば答えがだせるからな」

前言撤回、こいつ正真正銘のバカだw

隼人「しかし、この教室はボロすぎるにもほどがあるな。もうちょっとましかと思ってたんだけどな。」

明久「確かにそうだね」

???「すみません、保健室に行っていて遅れてしまいました」

すると教室に入ってきた人がいた

???「姫路瑞希です、よろしくお願いしますっ!」

するとクラスの男子がその少女に質問をした

「はいっ!質問です!」

姫路「あ、は、はいっ。なんですか?」

いきなり質問されて驚く姫路。その小動物的なしぐさが可愛いな

「どうしてここにいるんですか?」

聞きようによつては失礼な質問が浴びせられる

隼人「なあ、雄二。あの子はここにいるのが変なのか?」

雄二「ああ、あいつはAクラス並の成績を持っているんだ」

そうか、じゃあなんでここにいるんだ？名前の書き忘れとかは無いだろうし

「そ、その……」

緊張した面持ちで身体を硬くしながら姫路が口を開く

「振り分け試験の最中、高熱を出してしまいまして……」

テストが受けられなかったからってFクラスか、大変だな

明久「途中退席したら無得点扱いなんだよ」

隼人「それは少し厳しいな」

明久「でしょ？僕もそう思うよ」

そんな姫路の言い分を聞き、クラスの中でもちらほらと言いつきの声
が上がる。

「そういえば俺も熱が出たせいでFクラスに」

「ああ、化学だろ？アレは難しかったよな」

「俺は弟が事故にあったと聞いて実力が出し切れなくて」

「黙れ一人っ子」

「俺は金縛りにあっていて家から出られなかったんだ」

『テストを受けていたお前を見たんだがあれはなんだ？』

『もう一人の僕だよ』

どこの遊○王だよw

『前の晩、彼女が寝かせてくれなくて』

『さて、この異端者を処分しようと思うんだがみんなどう思う？』

『『『『異議なし！！』』』』

『すんませんでした！自分ちよーしくれてました！』

なかなか面白いクラスだな、これなら楽しくやっていけそうだな。

姫路「で、ではっ、一年間よろしく願いますっ！」

そんな中、逃げるように明久の隣の空いている席に着こうとする姫路。明久の顔が赤くなっている。嬉しいんだろっか？

姫路「き、緊張しましたあゝ・・・。」

席に着くや否や、安堵の息を吐いて卓袱台に座る姫路。すると姫路に話しかけようとした明久が雄二に先を越された。

明久「あのさ、姫――」

雄二「姫路」

明久の声にかぶせるように隣に座っている雄二が声をかける。雄二・
・明久がトリップしているぞw

「は、はいっ。何ですか？えーっと……」

慌てて雄二のほうに身体を向け、スカートの裾を正す姫路。椅子ではなくて座布団の上に座っているので裾が乱れやすいのだろう。

雄二「坂本だ。坂本雄二。よろしく頼む」

姫路「あ、姫路ですっ。よろしく願いします」

深々と頭を下げる姫路。挨拶も丁寧だし育ちがよさそうだな。俺と
いったら姉ちゃんによく女装をさせられていたな。逃げても逃げても
追いかけてくるからちよっとしたトラウマになりかけるところだ
った。

雄二「ところで姫路。体調は未だに悪いのか？」

明久「あ、それは僕も気になる」

明久が声をかけた途端、姫路がすごく驚いた。明久がブサイクだからか？それならしょうがないな。

姫路「よ、吉井君！？」

明久が姫路に驚かれてショックを受けている。

隼人・雄二「明久がブサイクですまん」

明久「ちよっと！隼人と雄二なりのフォローのつもりかもしれないけど僕は全然嬉しくないよ！？」

そりやそうだろう。ブサイクと言われて喜ぶ奴は滅多にいないだろ普通。

姫路「そ、そんな！目もパツチリしているし、顔のラインも細くて綺麗だし、全然ブサイクじゃないですよ！その、むしろ・・・」

姫路の顔が赤くなっている。もしかして明久のことが好きなのか？

雄二「そう言われると、確かに見てくれは悪くない顔をしているかもしれないな。俺の知人にも明久に興味を持っている奴がいたような気がするし」

隼人「よかったな明久。モテモテじゃないか」

明久「ありがとう隼人！で、雄二それって誰」

姫路「そ、それって誰ですかっ！？」

明久の台詞が姫路に遮られる。流石は年頃の女の子。この手の話には敏感だな。それとも明久の事だからか？

雄二「確か、久保」

久保さんか。どんな子だろ？

雄二「利光だったかな」

久保利光 ↓ ♂（性別／オス）

明久「・・・・・・・・・・」

雄二「明久。声を殺してさめざめと泣くな」

隼人「雄二。明久の泣きたい気持ちもわかってやれ」

雄二「そうだな。すまん明久。気の済むまで泣くといい」

明久「貴様のせいで泣いてるんだ!!」

雄二「安心しろ明久。半分冗談だ」

半分冗談？

明久「よかった」。半分冗談か・・・・って半分冗談って何!？」

隼人「よかったじゃないか明久。半分冗談で」

明久「全然よくないよ隼人! ねえ雄二残り半分は!？」

すると替えの教卓を持って先生が帰ってきた。

福原「はいはい。その人たち、静かにしてくださいね」

そのせいで、パンパン、と教卓を叩いて警告を発してきた。

隼人「あ、すいませー」

バキィツ バラバラバラ……

再び先生の前で教卓がゴミ屑と化す。まさか軽く叩いただけで2度も崩れ落ちるとは。

隼人「いや、マジでどんだけボロいんだよ!？」

福原「え……替えを用意してきます。少し待っていてください」

気まずそうに告げると、先生は足早に教室を出て行った。

改めてこのクラスの酷さを痛感させられる。

明久「あ。あはは……」

明久の隣で姫路が苦笑いをしている。そして明久が何か考え付いたのか雄二に話しかけていた。

雄二「ちよつといいかな？隼人もお願い」

隼人「どうした？」

雄二「ん？なんだ？」

明久「ここじゃ話しにくいから廊下で」

隼人「了解」

雄二「別に構わんが」

HR中なだけあつて廊下には誰もいない。

明久「この教室についてなんだけど」

隼人「確かにこれは酷過ぎるな」

雄二「Fクラスか。想像以上に酷いもんだな」

明久「でしょ？2人ともそう思うよね？」

隼人「もちろんだ」

明久「Aクラスの設備は見た？」

隼人「ここに来るときに見た。随分と豪華だったよな」

雄二「ああ。凄かったな。あんな教室は他に見たことがない」

一方はチョークすらないひび割れた黒板で、一方は値段もわからないほど立派なプラズマディスプレイ。これに不満のない奴はいないだろ。

明久「そこで僕からの提案。折角2年になったんだし『試召戦争』をやってみない？」

隼人「『試召戦争』っていうとテストの点数で勝負するやつか？」

明久「そうだよ」

雄二「戦争だと？」

明久「うん。しかもAクラス相手に」

雄二「……なにが目的だ？」

雄二の目が鋭くなる。明久を警戒しているのだろうか？

明久「いや、だって余りにも酷い設備だから」

雄二「嘘をつくな。全く勉強に興味のないお前が、今更勉強用の設備なんかの為に戦争を起こすなんて、そんなことはありえないだろうが」

明久が図星をつかれて焦っている。明久の目的はなんだろう？

明久「そ、そんなことないよ。興味がなければこんな学校に来るわけがー」

すると雄二が指摘する。

雄二「お前がこの学校を選んだのは『試験校だからこその学費の安さ』が理由だろ？」

また明久が図星を突かれて焦っている。明久、もうすこし頑張れよw

雄二「……姫路の為か？」

なるほど！姫路を快適な環境で勉強させるためにAクラスと戦争したいだなんて言い出したのか。明久は優しい奴だな。

明久「どうしてそれを！？」

雄二「お前はホントに単純だな。カマをかけるとすぐ引つかる。詐欺師の恰好の的だなお前」

雄二の目から警戒の色が消えて、代わりに楽しげな笑みが浮かぶ。

明久「べ、別にそんな理由じゃー」

雄二「はいはい。今更言い訳は必要ないからな」

隼人「別にいいんじゃないか戦争しても。誰かの為に一所懸命に頑張ることはとても素晴らしいことだと思うぞ。俺も明久にできる限り協力する」

明久「隼人……」

隼人「それに俺、召喚獣使ったことないから使いたいし！」

明久「そっちが本命だろ！」

当たり前だバカタレ。でも明久に協力するのも本当だ。俺は明久みたいなやつは好きだからな。といっても俺にそっちの趣味はないことをわかってほしい。俺は普通に女が好きだ！

雄二「俺もお前に言われるまでもなくAクラス相手に試召戦争をやるうと思っていたところだ」

明久「え？どうして？雄二だって全然勉強なんてしてないよね？」

雄二「世の中学力が全てじゃないって、そんな証明してみたくてな」

明久&隼人「????」

雄二「それにAクラスに勝てる作戦を思いついたしーおっと、先生が戻ってきた。教室に入るぞ」

雄二に促されるまま俺たちは教室に入った。

福原「では、自己紹介の続きをお願いします」

壊れた教卓を替えて（ボロだけど）、気を取り直してHRが始まる。

須川「えー、須川亮です。趣味はー」

特に何もおこらず淡々と自己紹介が続く。

福原「坂本君、キミが自己紹介の最後ですよ」

雄二「了解」

先生に呼ばれて雄二が立つ。ゆっくりと教壇に歩み寄る姿はまさにクラス代表の姿だった。

福原「坂本君はFクラスの代表でしたね」

先生に問われ頷く雄二。

雄二「さて、一つ皆に聞きたいことがある」

かび臭い教室

古く汚れた座布団

薄汚れた卓袱台

雄二「不満はないか？」

Fクラス一同（一部を除く）『『『大ありじゃあつ！！』』』

二年F組生徒の魂の叫び。

雄二「だろ？俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

「そうだそうだ！」

「いくら学費が安いからと言って、この設備はあんまりだ！改善を要求する！」

「そもそもAクラスだって同じ学費だろ？あまりに差が大きすぎる！」

堰を切ったかのように次々とあがる不満の声。

雄二「みんなの意見はもつともだ。そこで」

級友達の反応に満足したのか、自信に溢れた顔に不敵な笑みを浮かべて、

雄二「これは代表としての提案なんだがー」

これから戦友となる仲間たちに野性味満点の八重歯を見せ。

雄二「オーFクラスはAクラスに『試験召喚戦争』をしようと思う」

Fクラス代表、坂本雄二は戦争の引き金を引いた。

俺とFクラスと試召戦争 前編（後書き）

長くなってしまいすみません＜＞

次はDクラス戦を書きたいと思っています。応援よろしく願います♪

誤字・脱字などありましたらどんどん言ってください！

俺とFクラスと試召戦争 後編（前書き）

どうもバイトでクタクタの作者です！

日曜でもないにお客が多い>< 私に暇な時間をプリーズ！

では話目です、どうぞ♪

俺とFクラスと試召戦争 後編

雄二が宣戦布告をしたあと懐かしい奴が声を掛けてきた。

???「久しぶりじゃな。隼人」

隼人「ん？だれだ・・・って秀吉か！！」

秀吉「うむ。元気そうで何よりじゃ！でも帰ってきておるなら連絡ぐらいしてくれてもよかるうに」

そう言つて秀吉は少し悲しそうな顔をした。

隼人「それはすまない。でもお前が一緒の学校にいるなんてかなり嬉しいな」

秀吉「わしもまた隼人と一緒にいれて嬉しいぞい」

そうかゝ秀吉も一緒の学校か！知っている奴がいると少しは楽だな
いや待てよ、秀吉がいるってことはもしかして・・・

隼人「なあ秀吉」

秀吉「なんじゃ??」

隼人「秀吉がいるってことはもしかして・・・」

秀吉「うむ。姉上もこの学校じゃぞい」

やっぱりか！神様ありがとう！！今俺はあんたに土下座したいくらいだぜ」

秀吉「もしかして隼人は姉上にまだあつておらぬのか？」

隼人「ああ、まさかこの学校にいるとは思っていなかったからな」

秀吉「姉上も隼人がおることを知ったらさぞかし喜ぶじゃろうな」

隼人「そのことなんだが俺がいることは黙っててくれないか？」

あいつのことだからどうせAクラスにでもいるんだろう。Aクラスと試召戦争するんだからその時に会って話せばいいだろう。

隼人「俺たちAクラスと試召戦争する予定じゃないか？」

秀吉「そうみたいじゃな」

隼人「だからその時に会って話そうと思うんだ」

秀吉「うむ。承知したのじゃ」

しかしFクラスがAクラス相手に戦争をしようというのは無謀である。

『勝てるわけがない』

『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ』

『姫路さんがいたら何もいらない』

そんな悲鳴がクラスのあちこちから聞こえてくる。でも最後の奴は姫路へのラブコールだろwしかし確かに誰が見ても、AクラスとFクラスの戦力差は明らかだった。

文月学園に点数の上限がないテストが採用されてから四年が経過したらしい。このテストには一時間という制限時間と無制限の問題数を用意されている。その為、テストの点数は上限がなく、能力次第でどこまでも成績を伸ばすことができる。

また、科学とオカルトと偶然によって完成された『試験召喚システム』というものがある。

これはテストの点数に応じた強さを持つ『召喚獣』という自分の分身を呼び出して戦うことのできるシステムで、教師の立会いの下で行使が可能となる。

するとクラスメイトに雄二が自信満々に言った。

雄二「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる！……たぶん」

隼人「その最後の『たぶん』が無ければ最高だったんだが……」

雄二「細かいことは気にするな！」

そっいうものかよw

『なにを馬鹿なことを』

『できるわけないだろう』

『何の根拠があつてそんなことを』

『姫路さん結婚して〜〜！』

おい。さつきから最後の奴、姫路にアプローチしすぎだろww

雄二「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃っている」

こんな雄二の言葉を受けてクラスの皆が更にざわめく。
雄二の事だから何か策があるのかもしれないな。

雄二「それを今から説明してやる」

得意の不敵な笑みを浮かべ、雄二が壇上から皆を見下ろす。

雄二「おい康太。姫路のスカートの中を覗いてないでこっちにこい」

康太「……………！！（ブンブン）」

姫路「は、はわっ」

畳の跡がくつきりついた顔で否定されても説得力がないぞ。

雄二「土屋康太。こいつがあ有名な、寡黙^{ムツ}なる（ツ）性識者^{リーニ}だ」

隼人「明久。ムツツリーニは有名なのか？」

明久「うん！男子生徒には畏怖と敬意を、女子生徒には軽蔑をもたれているよ！」

隼人「要するにスケベってことか……」

なかなか面白い奴だな、いろんな意味で。
仲良くなれそうだ。

『奴がムツツリー二だと！？』

『だが見る。あそこまで明らかな覗きの証拠を未だに隠そうとして
いるぞ』

『ああ。ムツツリの名に恥じない姿だ』

姫路「???」

姫路が頭に疑問詞を浮かべているみたいだ。

隼人「気にするな姫路。世の中知らないほうがいい事はたくさんあるんだ」

姫路「そ、そうなんですかあ」

雄二の視線が姫路を向いている。次は姫路の番かな？

雄二「姫路のことは説明する必要はないだろう。皆だってその力はよく知っているはずだ」

姫路「えっ、わ、私ですかっ？」

雄二「ああ。ウチの主戦力だ。期待している」

もし試召戦争に至るとしたら、確かに彼女ほど頼りにできる奴はいないだろう。

『そうだ、俺たちには姫路さんがいるんだった』

『彼女ならAクラスにも引けを取らない』

『彼女は俺の天使だ』

いい加減最後の奴諦めろよ……

雄二「木下秀吉だっている」

秀吉か……まてよ？秀吉ってたしか勉強苦手だった記憶があるんだが？

『おお……』

『演劇部のホープ&我がクラスのアイドル!!』

秀吉「わしは男じゃ!!」

秀吉、諦める。こいつらはお前を完全に女だと思っている。俺も初めて会ったときは女の子だと勘違いしていたからな。

雄二「それに俺も全力を尽くす」

『確かに、なんだかやってくれそうな奴だ』

『坂本って、小学生の頃は神童とか呼ばれてなかったか？』

『それじゃ、坂本も振り分け試験のとき体調不良だったのか』

『実力はAクラスレベルが2人もいるってことか！』

気づけばクラスの士気は確実に上がっていた。

雄二「それに吉井明久だっている」

・・・シンーーーーー

一気に上がっていた士気が急降下した。

明久「ちよつと雄二！なんでこんな時に僕の名前をいうのさ！全然
必要ないよね！？」

雄二「お前の存在が？」

明久「違う！ここで僕の名前を出すことがだ！！」

さすがに存在を否定されたら怒るのも無理はないな。でも明久だからな〜

『誰だよ、吉井明久って』

『聞いたことないぞ』

明久「ホラ！折角上がりかけてた士気に翳りが見えてるし！もっと普通の扱いをーって、なんで教卓にいる全員で僕を睨むの！？士気が下がったのは僕のせいじゃないよね！？」

雄二「知らないなら教えてやる。こいつの肩書は『観察処分者』だ」

「それってバカの代名詞じゃなかったけ？」

明久「ち、違うよっ！ちよっとお茶目な十六歳につけられる愛称で」

雄二「そうだ。バカの代名詞だ」

明久「肯定するな、バカ雄二！」

隼人「それってつまりどういうものなんだ？」

ちよつとだけ『観察処分者』というのが気になってしまう。

雄二「隼人は転校してきたばかりだから知らないのも無理はない。具体的には教師の雑用係だな。力仕事とかそういうた類の雑用を、特例として物理干涉できるようになった召喚獣でこなすといった具合だ」

隼人「そうか、サンキュー」

雄二「それだけじゃないぞ隼人」

隼人「まだ何かあるのか？」

今まで聞く限りじゃ便利じゃないか。俺も欲しいくらいだ。

雄二「召喚獣が受けた痛みや負担は召喚者にも何割か返ってくる」

前言撤回、まったく欲しくない。

隼人「てことは、試召戦争で召喚獣がやられると自分も苦しいってことだろ？それじゃあまり召喚できないんじゃないのか？」

戦力が1人分減るといことなのでそれはちよつと厳しいな。

雄二「大丈夫だ、いてもいなくても同じような雑魚だからな」

隼人「なるほど。それなら大丈夫だな」

明久「雄二、そこは僕をフォローする台詞を言うところだよね！？それに隼人も納得しないでよ！！」

すまない明久、『明久だから別にいつか！』と思っってしまったんだ・
・・・・

明久「貴様、それでも友達か！！」

隼人「なに！？心を読んだと！？」

明久「なんとなく分かったんだ！」

なんて恐ろしい奴だ！

雄二「とにかくだ。俺たちの力の証明として、まずはDクラスを征服してみようと思う」

まずはDクラスか。俺もはやく召喚獣に慣れておかないとな。

雄二「この境遇は大いに不満だろう？」

『『『当然だ!!』』』

雄二「ならば全員^{ベン}筆を執れ!出陣の準備だ!」

『『『おおーっ!!』』』

俺とFクラスと試召戦争 後編（後書き）

Dクラスまでいけなくて申し訳ないです><

次はいけると思うので応援よろしくです♪

誤字・脱字などあったら言ってください！

俺とDクラスと試召戦争 前編（前書き）

どうも作者です♪

長くなりすぎると思ったので前編と後編に分けて投稿したいとおも
ます！

それでは前編です、どうぞ！

俺とDクラスと試召戦争 前編

いよいよDクラスとの試召戦争。宣戦布告の使者は誰がするんだろうか？普通下位勢力の宣戦布告の使者は酷い目に遭うはずだから俺はやりたくはないな。でも雄二のことだから明久にでも行かせる気だろうな。

雄二「明久にはDクラスへの宣戦布告の使者になつてもらう。頼めるな明久？」

ほら、やっぱりねw

明久「・・・下位勢力の使者つて酷い目に遭うよね？」

雄二「大丈夫だ。大事な大使に酷いことするはずがないだろ？安心して逝つてこい！」

明久「ねえ、今漢字が違ったような気がしたんだけどホントに大丈夫なの??」

大丈夫なわけないだろ、やっぱりバカだな明久は…………

雄二「気のせいだ。俺を誰だと思っている？」

隼人「詐欺師」

雄二「何を言つんだ隼人。俺は詐欺師じゃなくて『紳士』だ」

隼人「いや・・・そうは見えないんだがw」

まっ、俺が行くわけじゃないから別にいいか。

雄二「ともかく俺を信じる明久。俺は友人を騙すような真似はしない！」

堂々と嘔吐いちゃってるよこの人！！

明久「分かったよ。それなら使者は僕がやるよ」

雄二「ああ。頼んだぞ明久」

クラスメイトの歓声と拍手に送り出され、明久は毅然とした態度でDクラスへと逝った。生きて帰れよ明久……

明久「騙されたよ！？」

やっぱりな、それでこそ明久^{バカ}だ。

雄二「やはりそうきたか」

平然と言い放った。さすが自称『紳士』いや『ペテン師』だな。

明久「やはりってなんだよ！やっぱり使用者への暴行は予想通りだったんじゃないか！何が『紳士』だ、この『詐欺師』め！！！」

雄二「当然だ。そんなことも予想できないで代表が務まるか。お前なら絶対騙されてくれると思ったただけだ」

隼人「やはりお前はバカだな明久」

明久「少しは悪びれるよ！それと隼人も僕に謝れ！！」

普通気づくだろうwでもそこが明久らしくていいな」

姫路「吉井君、大丈夫ですか？？」

ところどころ制服まで破れている明久の有様をみて、姫路が駆け寄ってくる。

明久が姫路が心配してくれていることに感激している。

????「吉井、大丈夫？」

ん？まだ話していない奴が来たな。

すると彼女はおれに気づいて挨拶をしてくれた。

島田「紅月とは初対面だったわね。ウチは『島田 美波』宜しくね

」

隼人「ああ。俺は『紅月 隼人』仲良くしてくれ♪」

島田「こちらこそ♪それより吉井、ほんとに大丈夫？」

明久「あ、うん。ほとんどこすり傷」

島田が明久を心配している。やさしい子だな・・・

明久「心配してくれてありがとう」

島田「そう、よかった・・・。ウチが殴る余地はまだあるんだ・・・・」

心配ってそっちの心配かよwこの子絶対危ない!!

明久「ああっ！もうだめ！死にそう！」

隼人「島田・・・さすがに殴るのはやめといたほうがいいんじゃないか？」

島田「紅月にはまだ言っただけ無かったわね。ウチの趣味は吉井を殴ることなの」

趣味なら仕方ないな。人の趣味をとにかく言う権利は俺にないからな♪

隼人「そうか。趣味だったのか、それなら問題ないな♪思う存分殴るといい」

明久「ちよつと隼人！全然問題ないからね！？」

雄二「そんなことはどうでもいい。今からミーティング始めるぞ！」

今からミーティングみたいだな、俺もやつと召喚獣を使えるな。

隼人「ムツツリーニ」

ムツツリーニ「？（サスサス）」

隼人「覗いていた時の畳のあとならもう消えてるぞ」

ムツツリーニ「・・・・・・・・！！（ブンブン）」

隼人「今更否定されてもお前がHなのは分かってるから」

ムツツリーニ「・・・・・・・・！！（ブンブン）」

ここまで否定し続けるなんてある意味すごいよなw

隼人「ちなみに何色だった？」

ムツツリーニ「みずいろ」

隼人「即答かよ！？」

さすがムツツリーニ。

隼人「ムツツリーニにお勧めの本があったから今度持ってくるわ」

ムツツリーニ「今度隼人が困っているときに力になろう！」

隼人「気にするな」

そうやってのんびりと教室で話していると、

島田「吉井、紅月。行くわよ」

ぐいつと島田に腕を引っ張られた。

隼人「了解」

明久「あー、はいはい」

島田「返事は一回！」

明久「へーい」

島田「一度、D a s B r e c h e n——ええと、日本語だと・・・」

島田が言いよどむ。

ムツツリーニ「・・・調教」

近くからムツツリーニの声。

島田「そう。調教の必要ありそうね」

明久「せめて教育とか指導とかって言ってくれない？」

島田「じゃ、中間をとってZ i i c h t i g u n g——」

隼人「折檻じゃなかったか？」

明久「なんで悪化してるのさ!？」

島田なりのお前への愛情だ。

隼人「というかムツツリーニ。どうして『調教』なんてドイツ語してるんだ？」

ムツツリーニ「・・・一般常識」

それはお前だけだろう・・・さすがエロの帝王だ。

そんな会話をしながら俺たちは屋上に向かっていた。Fクラスのかび臭い教室にいるより屋上のほうが風も気持ちいいし、空気も新鮮だからいいよな。

雄二「それより明久。宣戦布告はしてきたな？」

雄二が段差に腰を下ろしながら言った。しかし雄二の座るところに鳥の糞が・・・

俺は持っていたテニスボールを雄二めがけて投げた。

雄二「痛って!! 隼人デメエーなにしゃがる!!」

隼人「雄二、そのまま座っていたらお前の尻が鳥の糞まみれになるところだったぞ」

雄二は自分が座ろうとしていたところを見て驚いていた。

雄二「隼人すまない。助かった」

隼人「まだ まだ だね」

ちよつと言つてみたかった俺だった。

雄二「で、どうなんだ明久？」

明久「一応今日の午後に開戦予定と告げてきたけど」

そしてみんなが腰を下ろしていく。

島田「それじゃ、先にお昼ごはんってことね」

雄二「そうなるな。明久、今日の昼くらいはまともな物食べろよ」

隼人「明久は何を食べているんだ？」

明久「主に砂糖と塩と水だね」

隼人「それは食べてるとは言わないだろ。しょうがない、俺がおこつてやるよ！」

さすがに可哀想なので購買のパンくらい奢つてやろつ。

明久「本当！？ありがとう隼人！！僕は君と友達になれてよかったよ！……」

隼人「大げさな奴だなw」

姫路「えっ、吉井君ってお昼食べない人なんですか？」

隼人「食べてるとは言えないな」

姫路が驚いたように明久を見る。彼女は規則正しい生活をしているんだろうな。いろいろと発育もよさそうだし……。特に胸が。

姫路「あの、よかつたらお弁当作ってきましようか？」

明久「え？」

突然の優しい言葉に明久は耳を疑っていた。

隼人「よかつたな明久。女子からの手創り弁当だなんて羨ましいぞ」

明久「うん！」

島田「…………ふ…………ん。瑞希って随分優しいんだね吉井だけに作ってくるなんて」

なんだか面白くなさそうな島田の言葉。少し棘のある言い方。もしかして島田も明久のことが好きなのか？

姫路「あつ、いえ！ その、みなさんにも……………」

雄二「俺たちも？ いいのか？」

姫路「はい。嫌じゃなかったら」

おお。女子からの手料理！それはたのしみだなあ。姫路の事だから料理も上手なんだろうな。

秀吉「それは楽しみじゃのう」

ムツツリーニ「・・・・・・・・・・楽しみ」

これで姫路本人も含めると7人分。作るのが大変だな。

明久「姫路さんって優しいね」

姫路「そ、そんな・・・・・・・・・・／＼／」

明久「今だから言うけど、僕、初めて会う前から君のこと好き――」

雄二「おい明久。今振られると弁当の話はなくなるぞ」

明久「――にしたいと思ってました」

なにを言うんだこのバカは。しかも会う前からって知らない奴をどうやって好きになるんだよw

秀吉「明久よ。それじゃと欲望をカミングアウトした、ただの変態じゃぞ？」

雄二「明久。お前はたまに俺の想像を超えた人間になる時があるな」

隼人「要するにバカってことだろ？」

明久「だってお弁当が……………」

そんなに食いたいのかよ!?

雄二「さて話がかなり逸れたな。試召戦争に戻ろう」

おお。すっかり忘れていた。

雄二「隼人は今のうちに回復試験の準備をしていてくれ。今点数が無いんだろ?」

そつえば無得点扱いだから点数がないんだった。

隼人「了解。でもなんでそれを知っているんだ?」

雄二「鉄人から聞いた」

鉄人?……………ああ、あのチンパンジーか。

明久「ていうか何でDクラスなの?」

隼人「姫路が万全の今、Eクラスと正面から戦っても負けることはないだろう」

明久「それならDクラスとは正面からぶつかると厳しいの?」

雄二「ああ。確実に勝てるとは言えないな」

明久「だつたら最初からAクラスに挑もうよ」

俺たちの目標はAクラスであつてDクラスではない。

雄二「初陣だからな。派手にやつて今後の景気づけにしたいだろ？
それに打倒Aクラスの作戦に必要なプロセスだしな」

すると姫路が小さい声で話しかけてきた。

姫路「紅月君……」

隼人「どうした姫路？」

姫路「明久君と紅月君と坂本君は前から試召戦争について話し合つていたんですか？」

隼人「ああ。明久が試召戦争をやろうと言い出したのはお前のためだ姫路」

姫路「私ですか??」

隼人「姫路をより良い環境で勉強させたいって言ひ出してな」

やっぱり明久はほんといい奴だな。

姫路「そ、そうなんですか……」

隼人「だから俺たちも試召戦争頑張ろうな!」

姫路「は、はいっ!!」

俺とDクラスと試召戦争 前編（後書き）

続きの後編は夜に投稿したいと思います、待っていてください♪

誤字・脱字・感想などあったらどんどんかいてください！

俺とDクラスと試召戦争 後編（前書き）

やっと完成しました。

ではござい

俺とDクラスと試召戦争 後編

俺は今、姫路と一緒に回復試験を受けていた。

隼人SIDE

はやく試召戦争に行きたいので200点くらいでやめておこうかな。
でも科学と数学が問題だな・・・まったく分からんぞww

姫路「先生、次の用紙をくださいっ!!」

高橋「はいどうぞ」

しかし姫路はいいよな。苦手科目がなさそうだし、俺も少しは頑張ってみるか!!

姫路「先生、次の用紙をくださいっ!!」

高橋「わ、わかりました!」

それにしても姫路の奴すごい気合いだな。
こうなったら自棄だ!あとはどうにかなるだろう・・・

隼人「先生、俺も次のテストください！」

高橋「わかりました」

みんな頑張ってくれよ……

明久SIDE

美波「吉井！木下たちが渡り廊下でDクラスの連中と交戦状態には
いったわよ！」

ポニーテールを揺らしながら同じ部隊の島田さんが駆け寄ってきた。
背は高くて脚も細くて綺麗なのに何か物足りない……何が足
りないんだろう？

明久「ああ、胸か」

島田「あんたの脊髄を曲げるわ」

明久「それって死刑だよね！？」

まずい、何かのスイッチを押してしまったようだ。

明久「そ、それより試召戦争に集中しないと！！」

現在前線にいるのは秀吉率いる先攻部隊で、Fクラスの間辺りに僕達がいる中堅部隊が配置されている。不本意ながら部隊長を任されている僕は部隊の皆を導く義務がある。まずは戦場の雰囲気を感じてみよう。

西村『さあ来い！この負け犬が！！』

『鉄人！？嫌だ、鬼の補習はいやだ！！』

『あれは補習じゃない！拷問だ！！』

みんな死にもの狂いだね……僕も鬼の補習なんて絶対に嫌だ！！

西村『黙れ！この戦争が終わるまでは補習室で特別講義だ！！補習が終わるころには趣味は勉強、尊敬する人は二宮金次郎、といった理想的な生徒になっているだろう！！』

先生、それは洗脳です……

よし、雰囲気はよくわかった。

明久「島田さん、中堅部隊全員に到達」

島田「ん、作戦でも伝えるの？」

僕が出すべき指示はもう決まっている……

明久「総員退避、と」

島田「逃げてどうするのよ!？」

殴られた!! しかも鳩尾を。

明久「お腹が痛い!!！」

島田「トイレ？」

君のせいだよ君の。

島田「いい、吉井? ウチらの役割は木下達の部隊の援護でしょ? アイツらが消耗した点数を補給する間、ウチらが前線を維持する。その重要な役割を放棄したらアイツらは補給ができないじゃない!」

確かに彼女の言う通りだ。秀吉たちが頑張っているのに、僕は鬼の補習が怖くて逃げようとしていたなんてどうかしていたよ!!

明久「僕が間違っていたよ。補習を恐れず戦争に勝つことだけを考えよう」

島田「個別戦闘は弱いけど、多対一で戦えばいいのよ」

明久「そうだね。よし、やるぞ!!」

「島田、前線部隊が後退を開始したぞ!」

島田「総員撤退よ」

さっきと言っていることが違うよ!?! やっぱ僕の考えは間違っていないかったんじゃないか!!

島田「吉井。総員撤退で問題ないわね？」

大ありだと思う。

明久「よし、逃げよう。僕達には荷が重すぎた」

くるりとFクラスに向かって方向転換。

すると振り向いた先には本陣にいるはずの横溝君がいた。

明久「横溝君、どうしたの？」

横溝「隊長より伝令を預かってあります」

メモを見てみるとそこには………

横溝「『逃げたら明日は無いと思え』だそうです」

そう書かれていた。

明久「全員突撃しろーっ！」

気が付いたら戦場に向かって全力ダッシュしていた。これはFクラス
の勝利のためであって別に明日が欲しいとかそういうことじゃない
からね！？

秀吉「明久、援護に来てくれたんじゃない！」

ああなんだ。秀吉じゃないか。いつみても可愛いな。

明久「秀吉、大丈夫？」

秀吉「うむ。戦死は免れておる。じゃが、点数がほとんど残っておらぬ」

明久「そうなの？召喚獣の様子は？」

秀吉「かなりへロへロじゃ。これ以上の戦争は無理じゃな」

明久「そっか。それなら急いでテストを受け直してこないと」

秀吉「そうじゃな。一、二教科受けてくるとしよう」

言うや否や秀吉がテストを受けに行った。秀吉の後に続いて前線部隊に配置されていた人たちが続く。

島田「吉井、試召戦争のルールは覚えてる？その科目の教師がいないと召喚できないからね！」

明久「わかってる！」

島田さんの忠告の通り、テストの戦争で勝負する試召戦争にはいろいろなルールがある。

文月学園におけるクラス設備の奪取・奪還および試召戦争のルール

一、原則としてクラス対抗戦とする。各科目担当教師の立会いにより試験召喚システムが起動し、召喚が可能となる。なお、総合科目勝負は学年主任の立会いのもとでのみ可能。

二、召喚獣は各人一体のみ所有。この召喚獣は、該当科目において最も近い時期に受けたテストの点数に比例した力を持つ。総合科目については各科目最新の点数の和がこれにあたる。

三、召喚獣が消耗するとその割合に応じて点数も減算され、戦死に至ると0点となり、その戦争を行っている間は補習室にて補習を受講する義務を負う。

四、召喚獣はとどめを刺されて戦死しない限りは、テストを受けなおして点数を補充することで何度でも回復可能である。

五、相手が召喚獣を呼び出したにも関わらず召喚を行わなかった場合は戦闘放棄とみなし、戦死者同様に補習室にて戦争終了まで補習を受ける。

六、召喚可能範囲は担当教師の周囲半径10メートル程度（個人差あり）。

七、戦闘は召喚獣同士で行うこと。召喚者自身の戦闘参加は反則行為として処罰の対象になる。

八、戦争の勝敗は、クラス代表の敗北をもつてのみ決定される。この勝敗に対し、教師が認めた勝負である限り、経緯や手段は不問とする。あくまでもテストの点数を用いた『戦争』であるという点を常に意識すること。

島田「吉井、見て！」

隣を走る島田さんが叫ぶ。なんだ？

島田「五十嵐先生と布施先生だわ！Dクラスの連中、科学教師を呼んできたわ！」

まずい、このままだと戦闘になってこちらが明らかに不利だ！

戦闘になろうとしたときこちらに駆け寄ってくる人影が見えた。

隼人「吉井・島田！大丈夫か？」

回復試験を終えて隼人が援護に来てくれたみたいだ。

明久「隼人！こっちは無事だよ。でも前線部隊がかなり消耗しているよ」

島田「ちよつと戦況は厳しいわね」

やっぱりFクラスとDクラスではこちらのほうが不利か。するとDクラスから1人の少女がこちらに向かってきた。

???「あつ、そこにいるのは美波お姉さま！五十嵐先生こっちに来てください」

島田「み、三春!？」

まずい、島田さんが見つかってしまった。このままじゃ戦闘になってしまう!!すると隼人が僕たちの前に立った。

隼人「明久に島田、ここは俺に任せて先に行け!」

明久「分かったよ、あとは頼んだよ隼人!」

島田「負けるんじゃないわよ紅月!絶対にその子を私のところに近づけないでね!!」

隼人「りよ、了解・・・」

隼人SIDE

島田とあの子の間に何かあるんだろうか?

清水「私とお姉さまの邪魔はさせません!Dクラス『清水 三春』科学勝負を申し込みます!——試験召喚!」

隼人「——試験召喚っ!」

呼び声とともに俺の周りに幾何学的な魔法陣が形成される。
呼び出された召喚獣は俺にそっくりのテニスのユニフォームを着て

ラケットとボールを持っていた。そつくりだが背丈は80センチくらいだ。

Dクラス 清水三春 科学 94点

VS

Fクラス 紅月隼人 科学 62点

さすがに科学じゃこれくらいしか取れないなw

清水「あなたを倒してお姉さまと2人で愛の巣を作んですっ!」

この子は同性愛者なのか??

隼人「俺も負けるわけにはいないんでねっ!」

俺はラケットでボールを清水の地面めがけて打った。

清水「どこを狙っているんですか?そんなんじゃあたりま——きやつ!」

ボールは地面にあたると同時に跳ね上がって清水の召喚獣の顔面に直撃した。

隼人「ツイスト・サーブって言うんだよっ!」

Dクラス 清水三春 科学 74点

Fクラス 紅月隼人 科学 62点

これで差が縮まったな。

清水「まだ負けませんっ！」

清水はサーベルを構えて俺に向かってきた。それをかわして次の攻撃態勢に入った。
すこし慣れてきたな。

隼人「どうした、こんなもんか？じゃあ次いくぜ！」

俺は清水の手首めがけてスマッシュを打ち、清水のサーベルを叩き落として――

隼人「破滅への輪舞曲！！」
ロンド

――跳ね返ってきた球を清水の召喚獣の頭部めがけて打った。

「Dクラス 清水三春 戦死！！」
なんとか勝てたな。いやあ、面白いな、テニスは！

西村「戦死者は補習！！」

すると戦死者を連行するために鉄人こと西村先生がやってきた。

清水「お姉さま……、三春は諦めませんかね……！！」

どんだけ好きなんだよw

S I D E E N D

そして明久たちに合流したが戦況は芳しくないらしい。

明久「隼人、勝ったんだね！60点ぐらいだったけど大丈夫だったの？」

隼人「ああ。相手が弱くて助かったな」

島田「よくやったわ紅月！あの子はちょっと苦手なのよ……」

隼人「島田もえらい奴に気に入られたな」

そんな話をしているとクラスメイトの須川の声で放送が流れてきた。

ピンポンパンポン 連絡致します

須川 船越先生、船越先生

呼び出した先生は明久たちが話してた船越先生というらしい。

須川 吉井明久君が体育館裏で待っています

須川………ナイス！！

須川 教師と生徒の垣根を越えた大人の話があるそうです

ちなみに後から聞いた話だと船越先生は単位を盾に生徒に交際を迫っていたらしい。なんて危険な先生なんだっ！

『吉井隊長！あんた男の中の男だよ！』

『吉井隊長の死を無駄にするな！！』

『こんな勇敢な隊長は他にいないぞ！』

前衛部隊の仲間たちが明久に向かって握手を求める。俺も握手してもっらおっと！

『おい、聞いたか今の放送？』

『ああ。あんな頑固たる意志を持っている奴らに俺たちが勝てるのか？』

『Fクラスの吉井・・・・・・・・イカスぜ』

そんな声がDクラスの中から聞こえてくる。

隼人「明久、この調子だといけるんじゃないか？」

明久「・・・・・・・・す」

隼人「す？・・・好き？」

明久「須川ああああああっ！！」

明久が血の涙を流しながらどこかへ走って行った。

『Dクラス塚本打ち取ったり〜〜』

一際大きな声が聞こえてくる。

『Dクラスの本隊が動き出したぞ！！』

しかしもうすぐアイツの回復試験が終わるだろうからそれまでの辛抱だな。

今までどこにいていたのか明久がDクラス代表平賀に向かって突撃していた。

明久SIDE

明久「向井先生！Fクラス吉井が――」

玉野「Dクラス『玉野美紀』、試験召喚^{サモン}」

明久「なっ、近衛部隊！？」

平賀「残念だったな、船越先生の彼氏クン？」

勝ち誇った平賀君の顔。なんかむかつく！！

明久「ち、違う！アレは雄二が勝手に」

平賀「そんなに照れなくてもいいぞ吉井♪ 玉野さん、彼に祝福を」

玉野「分かりました」

玉野さんはすでに召喚獣を呼び出して攻撃態勢だ！！

明久「ちくしょう！あと一步でDクラスを僕の手で倒せたのにっ！」

平賀「いくら防御が薄くても、さすがにFクラスの生徒が近づいたら近衛部隊が来るに決まっているだろう？でも、近衛部隊がいなくてもお前じゃ無理だけど」

平賀君がフンツと鼻を鳴らして僕を一瞥した。
くそっ、その鼻へし折ってやりたいっ！！

明久「たしかに僕じゃ無理だろうね。だから――」

ひと息いれて……

明久「姫路さん、よろしくね」

平賀「何を言っているんだお前は？」

そんな平賀君の後ろから申し訳なさそうに姫路さんが出てきた。

姫路「あ、あの・・・」

平賀「え、姫路さんどうしたの？Aクラスはこの廊下通らないはずだよな？」

現状を理解できていないようだね平賀君！まさか姫路さんがFにいるなんてだれも思わないだろう！！でも僕は姫路さんがFクラスで嬉しいけどね！

姫路「いえ、そうじゃなくて・・・」

もじもじと身体を小さくさせる姫路さん。やっぱり可愛いな~~~~
お持ち帰りしたいくらいだ。

姫路「Fクラス 姫路瑞希です。よ、宜しくお願いします」

平賀「あ、こちらこそ」

姫路「そ、その・・・Dクラス平賀君に現代国語勝負を申し込みます」

平賀「・・・はあ、どうも」

姫路「さ、試験^{サモン}召喚ですっ！」

平賀「え？あ、あれ？」

Fクラス 姫路瑞希 現代国語 339点

Dクラス 平賀源二 現代国語 129点

未だに現状が理解できていない平賀君。姫路さんの召喚獣は鎧に大剣を構えたいかにも強そうな格好だった。平賀君は相手にならないだろうな……

姫路「ご、ごめんなさいっ！」

Dクラス代表 平賀源二 戦死

こうしてFクラス対DクラスはFクラスの勝利で幕を閉じた……
……

俺とDクラスと試召戦争 後編（後書き）

グダグダになってしまいすみません。自分でも書いていて途中で
らわけがわからなくなりましたw w

睡魔と闘いながら書いていたので誤字・脱字が目立つと思います。

誤字・脱字・感想などあったらどんどんかいてください！

俺と放課後と召喚獣（前書き）

どうも、作者です！

今回はDクラス戦のあとの放課後の話です♪

俺と放課後と召喚獣

Dクラス 平賀源二 討死

この知らせを聞いてFクラスの連中は歓声を上げていた。

『すげーよ俺たち！！Dクラスに勝ったぜ！！』

『さすが坂本だな！』

『やっぱりあいつは神童だ！！』

俺も雄二に感動していた。不利だったにも関わらずDクラスに勝利できたんだからな。あとで握手でもして貰おう！

雄二「あー、そう褒められると照れてしまうな」

雄二は頬を掻きながら言う。こういう雄二は見たことないな。

隼人「雄二。お前すごいな、握手してくれ！」

雄二「ああ。隼人か。お前も随分頑張ってくれたみたいだな」

そうやって俺たちは握手を交わす。すると明久も雄二に握手を求めている。でも今ちらつと刃物らしき物が見えたような……気のせいだな！

明久「雄二、僕も握手を！」

すると雄二は明久の手首を力いっぱい握り潰した。どうしたんだ？

明久「ぬおおっ！」

隼人「雄二、何やってるんだ？？」

明久「雄二……握手なのにどうして手首を握り潰しているの！？」

雄二「握り潰すに決まっているだろうが！！」

明久の悲鳴とともに後ろから包丁が落ちた……。ってお前殺人でもする気だったのかよ！？やっぱりちらっと見たのは包丁だったのか！！

明久「雄二、ただ僕は雄二に握手を——ぎゃああああ！！」

明久の手がどんどん青紫になっていく。これは止めたほうがいいのだろうか……

雄二「おい、誰かピーラー持ってきてくれー」

明久「剥く気！？僕の手を剥く気！？やめて雄二、僕が悪かった！！」

雄二「次は全身の皮を剥く」

明久「（土下座）」

明久「……哀れな奴」

平賀「まさか姫路さんがFクラスだったなんて……」

平賀が悔しそうにつぶやく。

姫路「そ、その、すみません……」

平賀「気にしないでいいよ姫路さん。Fクラスを甘く見ていた俺が悪いから」

これも勝負だ、悪く思っな平賀。しかし誰もFクラスが勝だなんて思わなかっただろうな。

平賀「で、設備の交換はどうする？今からだ無理だから明日でも大丈夫か？」

そうか、勝ったら設備の入れ替えができるんだったな。

雄二「その必要はない」

明久「どうしてさ雄二！折角苦労して勝ったのに！！」

お前は逃げ回っていたただけだろうがバカ。

雄二「最初からDクラスを奪う気なんて無かったからな」

隼人「そうなのか？」

雄二「俺たちの目標はAクラスだ。」

隼人「なんとなく雄二の考えが分かった」

たぶん雄二は設備の交換をしない代わり後で利用するつもりなんだろう。つまり種まきか。

明久「それなら最初からAクラスにしないのさ？」

雄二「少しは自分で考える。だから近所の中学生に『バカなお兄ちゃん』と呼ばれるんだ」

明久「失礼な！さすがに中学生には言われないうー！」

隼人「なら小学生には言われているのか？」

明久「・・・・・・・・・・」

隼人「図星かよ！？」

明久「小学生にまでバカと思われているなんて・・・・・・・・」

平賀「俺たちにとってはありがたいがそれでいいのか？」

雄二「すこし条件がある」

平賀「一応聞かせてもらおうか」

そして雄二はDクラスの窓の外にあるエアコンを指した。アレがどうしたんだろう？

雄二「なに。俺が指示を出したらあのエアコンを使えなくしてもら

「ただただ」

平賀「Bクラスの室外機か」

雄二「設備を壊すんだから多少教師に睨まれるがそのくらいで教室が守れるなら安いものだろ？」

平賀「たしかにこっちからしたら願ってもない提案だが、なぜそんなことを？」

雄二の事だから次の戦争で使っただろう……まったく、何考えているのかサッパリわからないな。

雄二「次のBクラス戦で必要なんでな」

平賀「……そうか。ではありがたくその条件を呑ませてもらう」

雄二「このことに関しては後日話し合うとして、今日はこれで解散しよう」

平賀「ああ、ありがとう。Aクラスに勝てるよう願っているよ」

雄二「無理するなよ、勝てないと思っているんだろ？」

そりゃ誰が考えても最低のFクラスが最上のAクラスに勝つなんて夢にも思わないだろう。

平賀「それはそうだ。まっ、社交辞令だな」

じゃ、っと手を挙げて平賀は帰って行った。

雄二「さて皆。今日はご苦勞だった！明日は消耗した点数の補充を行うから今日は帰ってゆつくり休んでくれ。解散！」

『『『『お疲れした！！』』』』

明久「雄二・隼人。僕らも帰ろうか」

雄二「ああ。そうだな」

隼人「すまない、俺はこれから用事があるから明久たちだけで帰ってくれ」

俺はちよつと行きたいところがあるからな。

明久「分かったよ隼人。また明日！」

雄二「じゃあな隼人」

隼人「ああ」

そういつて俺たちは今日の成果に満足しながら解散した・・・

俺と放課後と召喚獣（後書き）

お気に入り件数がやっと二桁を超えましたw

次に隼人のオリ話？みたいなのを書きたいと思っていますので応援
よろしくお願いします♪

誤字・脱字・感想などあったらどんどん書いてください！

番外編 俺とテニスと召喚獣（前書き）

どうも、作者です！

今回はオリジナルストーリーを書いてみました♪あと腕輪の能力を替えたので主人公設定のほうで確認してください^^

それでは、どうぞ♪

番外編 俺とテニスと召喚獣

俺は明久たちと別れた後、ある場所へと向かっていた。

隼人「確かこの辺だったよな」

すると部活動生達の声が聞こえてきた。

『一年、ちゃんと素振りしろよ』

『『『はいつ!』『』』

隼人「おっ、やってるやってる」

俺は今テニス部の練習を見ていた。ちよつとこの学校のテニス部に興味があつたので放課後に見にこようと思っていたのだ。

隼人「しかし楽しそうだな」部活に入る気は無いがちよつとはやってみたいよな」

すると見学していた俺の方へたぶん3年だろうと思う人が近づいてきた。

「???」「こんにちは、見学してるのかい?」

隼人「ええ。前の学校でテニスをやっていたもので」

「へえ、そうなのかい。もしかして入部希望とか?？」

隼人「ああ、違いますよ、ちょっと見ていこうかなと思ひまして」

???「それは残念、どうせなら少し打っていくかい?」

えっ、マジで!? ラッキ〜」

隼人「いんですか!？」

???「ああ。今日は自主練だから大丈夫だよ」

隼人「ありがとうございます!で、相手は誰ですか?」

???「うん、どうしようかな。じゃあ僕でもいいかな?」

隼人「大丈夫ですよ」

不知火「僕は不知火^{しりぬい} 八雲^{やくも}。一応男子テニス部の部長だよ」

この人が部長さんか、優しそうな人だな・・・

隼人「そうなんですか!俺は紅月 隼人です」

不知火「・・・紅月?どこかで聞いたことあるような?」

隼人「それより早く打ちましようよ!」

不知火「そうだね。1セットマッチで大丈夫かい?」

隼人「ええ。かまいませんよ」

いや、こつちにきて人とテニスするのはこれが初めてだからな。

「部長、その人は誰ですか??」

練習していた一年生が不知火さんに不思議そうに聞いた。

不知火「ああ。見学をしていたから少し打っていかないと僕が誘ったんだよ」

「部長はいつも優しいですね」

不知火さんはいつもこんなに優しいのか。尊敬するな。

不知火「すまないが審判を頼めるかな？」

「試合するんですか？」

不知火「うん。1セットだけね」

「分かりました！」

そうやって俺は不知火さんに貸してもらった体操着を着てコートに入った。

「お、何だ何だ？」

「部長が見学生と試合をするみたいだぞ！」

「でも部長なら負けないだろ？」

「確かにそうだよな」

いつの間にか自主練をしていた一年や二年も集まってきた。

隼人「不知火さん、他の三年は今日来ていないんですか？」

不知火「うん。もともと三年は僕だけなんだよ」

隼人「そうなんですか？」

不知火「まあね。準備するから少し待ってて」

そして試合が始まった。

主審「One set match、kouzuki to serve」

隼人「じゃ、行きますよっと!」

俺はラインぎりぎりにサーブを打ってネットに向かって走った。

不知火「速い!!」

そして不知火さんが打ったロブをスマッシュで返す。

主審「15-0」

不知火「速いサーブだね紅月君。驚いちゃったよ。」

隼人「次はちよっと危ないですよ」

そしてサーブに角度をつけて打つ。

不知火「ツイストサーブ!？」

不知火さんはツイストサーブを打ち返せず俺のポイントになった。

主審「30-0」

「おい、部長がおされてるぞ!」

「あの人何者?」

「たしか紅月って言ったよな？」

主審「Game、kouzuki」

「部長が1ゲームも取れないなんて……」

「すごいなアイツ」

そして今はゲームカウント5-0、次を取れば俺の勝ちだ。

隼人「いやあ、楽しいですね！」

不知火「ほんとだね。まさか紅月君がこんなに強いなんて♪」

隼人「じゃ、行きますよっ！」

そしてサーブを打ち不知火さんがそれをベースラインに打ってくる。

不知火「これならどうかっ！」

隼人「甘いですねっ！」

ベースラインに打たれた球を回り込んで逆クロスに打つ。

不知火「間に合え！」

そして不知火さんはロブを上げる。それを俺は走り込んでスマッシュ

ユで返した。

主審「Game set, Game won by kouzu ki」

不知火「ありがとう隼人君、いい経験になったよ」

隼人「こちらこそ、試合させていただいて感謝しています」

今度、明久たちとテニスコートにでも行こうかな。

不知火「今思い出したんだけど紅月くんは去年の全国大会優勝校の1年生選手だったんだね」

隼人「知っていたんですか？」

不知火「もちろん、去年の優勝者と戦えてとてもいい経験になったよ」

そう言つて不知火は握手を求めてきたので俺もそれに笑顔で応えた。

「すごいですね紅月さん！」

「今度テニス教えてくださいね！」

隼人「ああ。時間があつたらな」

いつの間にか1年生に囲まれていた。

不知火「また暇なときにいつでも遊びに来てよ。練習とか手伝ってもらえると助かるからね」

隼人「分かりました♪じゃあ、俺はこれで帰りますね」

不知火「うん。お疲れ様♪」

そういつて俺はテニスコートを後にした。
帰る途中に、なんか今回面白ネタが無かったようなと思ったが気にしないことにした。

番外編 俺とテニスと召喚獣（後書き）

なんかうまく書けてなくてすみません＞＜

今回はオリキャラを出してみました。詳細は後々書いていこうと思います！

次はたぶん明久の放課後の話から始めようかなと思っています♪

誤字・脱字・感想などあったらどんどん言ってください！

以上、作者からでした！

バカテスト（前書き）

今回はバカテストです♪

宿題のせいでなかなか小説を書く時間がありません><

それでは、どうぞ！

バカテスト

科学

問 以下の問いに答えなさい

『調理の為に火にかける鍋を製造する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。このときの問題点とマグネシウムの代わりに用意すべき金属合金の例を一つ挙げなさい』

姫路瑞希の解答

『問題点・・・マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点』

『合金の例・・・ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っかけ問題だったのですが、姫路さんは引っかけかりませんでしたね。

土屋康太の解答

『問題点・・・ガス代を払っていなかったこと』

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

紅月隼人の解答

『問題点・・・材料を忘れてしまったこと』

教師のコメント

そこも問題じゃありません。

吉井明久の解答

『合金の例・・・チタン合金』

教師のコメント

中華鍋でも作るんですか？

英語

問 以下の英文を訳しなさい。

「This is the bookshelf that my
grandmother had used regularly」

姫路瑞希の解答

「これは私の祖母が愛用していた本棚です」

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

紅月隼人の解答

「これは私の今は亡き祖母が死ぬまで愛用していた本棚です」

教師のコメント

・・・なんか申し訳ありません。ですが違う言葉が入っているの
で不正解にしておきます。

土屋康太の解答

「これは

」

教師のコメント

訳せたのはThis だけですか？

吉井明久の解答

「
● 「*x」

教師のコメント

できれば地球上の言語で。

数学

問 以下の問いに答えなさい

□ (1) $4 \sin X + 3 \cos 3X = 2$ の方程式を満たし、かつ第一象限に存在するXの値を一つ答えなさい。

(2) $\sin(A+B)$ と等しい式を表すのはどれか、?? ?の中から選びなさい。

? $\sin A + \cos B$

? $\sin A ? \cos B$

$$\begin{aligned} & \sin A \cos B \\ & \sin A \cos B + \cos A \sin B \end{aligned}$$

姫路瑞希の解答

$$\begin{aligned} & (1) \quad \sin A \cos B + \cos A \sin B \\ & (2) \quad \sin(A+B) \end{aligned}$$

教師のコメント

そうですね。角度を θ ではなく π で書いてありますし、完壁です。

紅月隼人の解答

$$(2) \quad \sin(A+B)$$

教師のコメント

まさか当てずっぽうで書いてくるとは……一応正解にしておきますが後で船越先生に特別講義をしてもらいましょうね。

紅月隼人のコメント

そんなバカなっ!?

土屋康太の解答

$$(1) \quad \sin A \cos B + \cos A \sin B$$

教師のコメント

およそをつけて誤魔化しても駄目です。それ以前に答えがあっ
てい
ません。

吉井明久の解答

『(2) およそ?』

教師のコメント

先生は今までたくさんの生徒を見てきましたが、選択問題でおよそをつける生徒は君が初めてです。後で紅月君と一緒に船越先生の特
別講義を受けてもらいましょうね。

紅月隼人のコメント

カモーーーン♪

吉井明久のコメント

嫌あああああ!!

物理

問 以下の文章の()に正しい言葉を入れなさい

『光は波であって()である』

姫路瑞希&紅月隼人の解答

『粒子』

教師のコメント
よくできました。

土屋康太の解答
『寄せては返すの』

教師のコメント
君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。

土屋康太のコメント
・・・・・・・・照れる／／／

吉井明久のコメント
『GN粒子』

教師のコメント
GNが無ければ正解でした。それと先生もガン。ムは好きです。

科学

問 以下の問いに答えなさい
『ベンゼンの化学式を書きなさい』

姫路瑞希の解答

『C 6 H 6』

教師のコメント

少し簡単すぎましたかね。

紅月隼人の解答

『 $C + 6 + H + 6$ 』

教師のコメント

紅月君は科学が苦手みたいなのでこれから伸ばしていきましょうね。

土屋康太の解答

『ベン+ゼン=ベンゼン』

教師のコメント

君は科学をなめていませんか？

吉井明久の解答

『B - E - N - Z - E - N』

教師のコメント

あとで土屋君と職員室に来なさい。

バカテスト（後書き）

今日の夜にできたら本編のほうを投稿したいと思っています！

それまでに宿題を終わらせないと・・・・・・バタッ（疲れ切って
ダウン）

以上、作者でした♪

僕と放課後と召喚獣（前書き）

すみません、昨日は書き終わって投稿せずに寝ていました。><
では本編です、どうぞ。

僕と放課後と召喚獣

隼人と別れたあと僕は雄二と教室で下校の準備をしていた。途中デニスコートから歓声が聞こえてきたけどなんだったんだろう？

明久「雄二、僕たちも帰ろうよ」

雄二「ああ。そうだな」

姫路「あつ、あのっ！坂本君っ」

すると姫路さんが雄二を呼び止めていた。とても真剣そうな顔をして。

雄二「ん、どうした姫路？」

姫路「実は坂本君に聞きたいがあるんですっ！」

雄二「おう。わかった」

そして雄二と姫路さんは教室の隅で話を始めた。姫路さんは話にすごく集中している。

今ならスカート捲り放題じゃないか！

悪魔「チャンスだぜ明久。早く捲ってこいよ、お前ならできるはずだぜ？」

くそ、僕の中の悪魔め！さては僕を悪の道に誘導したな！？舐めるなよ、僕の正義の心が悪魔なんかには負けるものか！！

・・・・・・・・。

・・・・・・・・。。

・・・・・・・・。。。

・・・・あれ？天使が出てこないぞ？僕の中の天使出てきてよ！？これだと僕には悪の心しか無いみたいじゃないか！！

すると二人が話しながらこちらに歩いてきた。

雄二「元々興味はあったが、きっかけはコイツだな」

姫路「吉井君がそんなことを言い出した理由って・・・・」

なんの話をしているんだろう・・・・・・それより僕の天使！いい加減に出てきてよ！このままだと悪魔に染まっちゃうよ！！

雄二「そういえば、振り分け試験の時に何かあったみたいだな。それに関係してるかもしれないぞ？ま、バカにはバカなりの譲れないものがあるんだろ？」

愛嬌たっぷりの笑顔で答える雄二。もしかして愛の告白！？姫路さんの好きな人って雄二だったのか！

悪魔「お前はとうしようもないバカだな・・・・・・・・」

悪魔が何か言っていたが聞こえないふりをした。

姫路「振り分け試験って——それじゃ、やっぱり」

雄二「俺の口から言えるのはこれが限界だな。だが多分、姫路の予想は間違っていないと思うぞ」

雄二「こんな可愛い子に好意を寄せられているなんて。ああ、憎しみで人が殺せる力がほしい……」

雄二「明久、そろそろ帰るぞ」

明久「了解。姫路さんはもういいの？」

雄二「ああ。これで決心が固まったようだしな」

雄二「が答えると姫路さんが湯気でも出るんじゃないか？というくらいに顔が真っ赤になっていた。写真でも撮って家に飾っておきたいな。」

明久「よく分からないけど、それじゃ帰ろっか。それじゃ姫路さん、また明日」

姫路「あつ、はいっ！さようなら！！」

顔を赤くしながら手を振る姫路さん。こんな時にムツツリーニがいたら！！そう後悔しながら僕は教室を後にした。

天使「……捲つてもいいんじゃないかな？」

僕の中の天使、出てくるの遅いよ！！今まで何してたの！？それと

何で悪魔の意見を肯定してるんだよ！！

明久「雄二、本当にDクラス戦って必要だったの？」

雄二「ああ、そのことか」

雄二と僕の帰り道は同じだからよくこうやって一緒に帰る。

天使『……………捲ってもいいんじゃないかな？』

僕の中の天使！何でもうでもいい場面で出てくるの！？あと雄二の何を捲れって言っただよ！？

雄二「なに、理由は簡単だ。試召戦争に慣れるためとか、他のクラスにプレッシャーを与えとか、自信をつけて士気をあげるとかな」

明久「それなら何でDクラスの設備を手に入れなかったの？」

どうせならFクラスみたいなボロ教室より少しましなDクラスの方がいいんじゃないかな？

雄二「俺たちの目的はあくまでAクラスだ。設備を交換することによって一部の奴らが満足して試召戦争に反対するかもしれないだろ？ そうならないため設備の交換をしなかったんだ」

いつもは馬鹿なのにこうやって話していると、とても馬鹿には見えない。さすが神童だなと思う。

明久「…………勝てるかな？」

雄二「もちろんだ、俺に任せておけ」

そういつて痛い目を見たことがあったような……………

雄二「目的の為に、明久にはきっちり協力してもらうからな、とりあえずは明日の補給テストだな」

明久「分かったよ、僕も少しは帰って勉強を——あれ？」

雄二「どうした明久？」

明久「ごめん雄二、教室に教科書忘れてきたみたい」

雄二「あほ、さっさと取って来い」

明久「ごめん、先に帰っていいよ」

雄二「当たり前だ。誰がお前なんか待つか」

明久「酷い、なんて奴だ!!」

せつかくあと少しで家なのに。さっさと取りに戻ろう。

そう考えながら走ることにし、やっと学校についた。あれ・・・
・？あそこにいるのは隼人じゃないかな？似ているけど別人だろう
ね。

明久「僕もドジだな」

そして上履きに履き替えて教室に向かう。多分誰もいないだろう、
少し先生の真似をして入ってみようかな」

明久「誰だ！そこで何をしている!!」

姫路「ご、ごめんなさいっ!!」

すると姫路さんの声が聞こえてきた。

明久「あれ、姫路さん？」

姫路「よ、吉井君!？」

誰もいないと思っていた教室には我がクラスのアイドル、姫路さんがいた。

僕と放課後と召喚獣（後書き）

明日から学校というのに宿題が全然終わっていないという作者です。

さてどうしたものか・・・これからバイトだしw

こうなったら！！

諦めようっ
と

誤字・脱字・感想などあったらどんどん書いてください！

以上、宿題の終わらない作者からでした

俺とお昼と召喚獣 前編（前書き）

こんにちわ、作者です！

今、台風が来ていて雨や風が強いですw

来週は体育祭だしいろいろ大変です><

それでは本編です、どうぞ♪

俺とお昼と召喚獣 前編

教室にはまだ姫路さんが残っていた。

姫路「どどどうしたんですか？」

そんなに慌ててこっちがどうしたのって聞きたいくらいなんだけど・
・・・
すると姫路さんの卓袱台の上には可愛いラブレターのような手紙があつた。

姫路「あつ、これは・・・」

これはアレだよアレ・・・・・なんかこう——と、とにかくラブレターな訳がないっ！！

悪魔『苦しい言い訳をするなよ・・・』

黙れ僕の中の悪魔！悪の心なんか迷惑される僕だと思つなよ！
だいたい、証拠がないじゃないか！

明久「うんうん、大丈夫だよ」

姫路「えっと——きゃっ」

卓袱台に蹟く姫路さん。蹟いた拍子に僕の前に手紙が飛んできてその一文が目に入る。

あなたのことが好きです

悪魔『これ以上はない物的証拠だな』

明久「・・・・・・・・・・」

悪魔『現実は厳しいんだ、諦めようぜ？』

手紙をたたんで姫路さんに笑顔で返す。

明久「これは新しい不幸の手紙かな？」

悪魔『おい、いい加減に認めろよ！それに新しい不幸の手紙ってなんだ！？』

悪魔め、邪魔をするんじゃない！！君の言葉は信用できないんだ、騙されないぞ！！

姫路「それはそれですごく困る勘違いですけど・・・・・・・・」

明久「そんなことしなくても僕がその相手に不幸をプレゼントしてあげるよ、あとで藁人形買って来なきゃいけないね」

姫路「吉井君、これは不幸の手紙じゃないですから」

明久「嘘だ！！今僕はこんなにも不幸な気分になっているのに！」

悪魔『それはお前の問題だろ……』

姫路「吉井君」

バタバタと子供のように暴れていた僕の手を姫路さんがぎゅっと握ってくれた。

悪魔の言う通り、現実を見よう……

手紙の主は雄二かな？すごく気になる。

明久「手紙の相手はウチのクラス？」

姫路「……はい／＼」

顔を真っ赤にして俯きながら答える姫路さん。

明久「そいつのどこがいいの？外見はそれなりだと思うけど」

姫路「いえ、外見じゃなくて。もちろん外見も好きですよ！」

明久「そうなんだ……」

姫路「はい、いつも明るくて、優しくて、楽しそうで……私の憧れなんです」

そいつって頬を赤く染める。雄二が優しい？今度、脳外科にでも紹

介してあげた方がいいんだろうか？

明久「その手紙、いい返事がもらえるといいね」

姫路「はいっ！」

明久「でも、僕だったら手紙より直接言ってもらった方が嬉しいかな」

でもこんな僕にそんなこと言ってくれる人いないだろうけど。

姫路「それは本当ですか？」

真剣に聞いてくる姫路さん。参考にでもするんだろうか？

明久「うん、僕だったらって話だけだね」

姫路「今言ったこと、絶対に忘れないでくださいね！」

なんだかよくわからないけど覚えておこう。

悪魔『お前の頭じゃ長くは覚えていられないだろうな』

黙れ悪魔！！

明久「うん、わかったよ、それじゃまた明日」

姫路「はいっ！」

嬉しそうに姫路さんは教室を後にした。

そして翌日の朝。

明久「おはよー」

隼人「おはよう明久、今日くらい早く来いよ」

雄二「おう明久。時間ギリギリだな」

俺たちは今、テスト前の予習をしている。

明久「みんなには何も言わなかったの？」

雄二「何がだ？」

明久「Dクラスの設備の事」

隼人「それならさっき雄二が皆に説明してたぞ」

明久が来る前に雄二はFクラスの皆に設備を交換しなかった理由を説明していた。

明久「ふーん、それより隼人」

隼人「なんだ？」

明久「昨日テニスコートにいなかった？」

隼人「ああ。どうして知ってるんだ？」

明久「勉強道具を忘れて取りに戻ったとき、隼人っぽい人がいたからそうかなと思ったんだよ」

明久が勉強道具を取りに戻るなんて、天変地異の前触れか？

隼人「ちよつと見学していたら打って行かないかって誘われてちよつと打ってたんだ」

明久「そうだったんだ。いつそ入部すればいいのに」

隼人「面倒くさいから嫌だな」

雄二「テニス部の顧問、美人らしいぞ？」

隼人「入部しよっかな」

明久「……………隼人」

やめろ、そんな目で俺をみるな！

そんな会話をしていると島田が慌てて教室に入ってきた。

島田「吉井!!」

明久「うぐっ!!」

入ってきていきなり島田が明久にハートブレイクショットを繰り出した。

あれ？伊達さんの技を島田が使ってるぞ・・・恐ろしい

隼人「見事に決まったな」

明久「・・・・・・・・」

島田「昨日はよくもやってくれたわね!!」

どうしてそんなに怒っているんだろう？

隼人「どうしたんだ島田？」

島田「このバカは昨日ウチを見捨てたうえに、消火器のいたずらと窓ガラスを割った犯人に仕立てあげてくれたのよ!!」

そういえば1時間目の担当教師はたしか・・・明久も終わったな。

島田「また彼女にしたいくないランキングが上がったじゃない!」

そんなランキングがあつたのか!!

島田「——と本来は掴みかかりたいけど充分罰を受けたみたいだし、許してあげる。それに今から・・・」

明久「さっきまで僕の時間が止まってたよ。それより今から何？」

隼人「よかったな明久、1時間目の数学のテストの担当——」

さらば明久。

隼人「——船越先生だぞ」

それを聞いた瞬間、明久が脱兎のごとく教室を出て行った。

明久「うあー……づがれだー」

どこからそんな声が出るんだろう？

明久は船越先生に近所のお兄さん（三十九歳／独身……お兄さん？）を紹介して難を逃れたらしい。

雄二「よし、昼飯食いに行くぞ！今日はラーメンとかつ丼とチャーハンとカレーとチキン南蛮とうどんと……」

隼人「どんだけ食う気だよ！？お前の腹はブラックホールか何か！？」

恐るべし坂本雄二……………

島田「私も一緒にいい？」

雄二「ああ。かまわないぞ」

ムツツリーニ「……………（コクコク）」

明久「僕は贅沢にソルトウォーターあたりを」

隼人「明久の分は俺が出してやろう」

明久「ホント！？隼人、君は僕の神様だよ……………」

すると姫路がもじもじしながら話しかけてきた。

姫路「あ、あの。皆さん……………」

明久「姫路さんも一緒にどう？」

姫路「あ、いえ。昨日の約束の……………」

秀吉「おお、もしか弁当かの？」

姫路「は、はいっ！迷惑じゃなかったらどうぞ！」

これはありがたい。姫路の料理か、きつとおいしんだろっな〜

明久「迷惑だなんてそんなことないよ！　ね、雄二！」

雄二「ああ。それは助かるな」

秀吉「相伴に与ろうかの」

ムツツリー二「……………ありがたい」

隼人「サンキュー姫路」

そういうことで今日の昼飯は姫路の弁当になった。

雄二「それなら俺は飲み物を買って来よう。昨日頑張ってくれた礼も兼ねてな」

島田「坂本、ウチも手伝うわ。荷物とか大変でしょ？」

雄二「悪い、頼む」

隼人「じゃ俺達は先に行くか」

雄二「俺達の間も残しておけよ。じゃ、行ってくる」

明久「了解」

そして俺達は屋上に向かった。まさかこの後にあんな悲劇が待って

いるなんてこの時は誰も知る由はなかった。

俺とお昼と召喚獣 前編（後書き）

なんかムツツリーニの出番が少ないような気がします（ていうかほとんど出てないw）

次はお弁当の後編です。姫路さんのポイズンクッキングの時間ですね♪

誤字・脱字・感想などあったら書いてください！

以上、アンカフェでした〜

俺とお昼と召喚獣 中編（前書き）

どうも、作者です！

今日はバイトが休みなので更新することができました♪

それでは中編です、どうぞ！

俺とお昼と召喚獣 中編

雄二と島田が飲み物を買に行ついたので俺たちは先に屋上に行くことにした。

明久「今日は天気がいいからお弁当日和だね♪」

秀吉「うむ。天気が良くて何よりじゃ」

姫路「シートを持ってきたので広げますね」

シートも持ってきたのか、用意周到だな。

隼人「気持ちいいな」

ムツツリーニ「……………（コクコク）」

そしてシートを敷き終えた姫路が作ってきた弁当出し、重箱をあけて皆に見えるように置く。重箱の中にはアスパラ巻きやエビフライにから揚げなどお弁当の定番商品がおいしそうに並んでいた。

隼人「すごいな、どれもこれも美味しそうだ」

明久「僕は今朝ごはんを抜いてきたからいっぱい食べるぞ！」

お前はいつも朝飯を抜いているようなもんだろぅが……………

秀吉「さっそく相伴に与ろぅかの」

隼人「雄二たちには悪いが先に食べるか」

明久「そうだね、じゃ僕は――」

ムツツリーニ「・・・・・・（パク）」

明久が食べる前にムツツリーニがエビフライを食べる。

明久「あつ、ずるいぞムツツリーニ！」

隼人「俺も食べるか・・・・・・あれ？」

エビフライを食べたムツツリーニが突然ガタガタと震えだした。

ムツツリーニ「・・・・・・」

そして動かなくなった・・・・・・あれ、どうしたんだ！？怖え！怖え！
よ！！！

秀吉「・・・・・・」

明久「・・・・・・」

隼人「・・・・・・」

3人で真っ青になった顔を見合わせる。

姫路「だ、大丈夫ですか土屋君！？」

ムツツリーニ「・・・・・・（コクリ）」

ムツツリーニが起き上がり……

ムツツリーニ「……………（グッ）」

そして姫路に親指を立てて……………

ムツツリーニ「……………（パタッ）」

また動かなくなった……………
たぶん『美味しかった』と伝えたかったんだろう。

姫路「お、お口に合って良かったです！」

姫路「……………合っていないぞw

このままでは三途の川を渡る羽目になりそうだ!!

姫路「いっぱい食べてくださいねっ」

すると小さい声で明久が話しかけてきた。

明久（……………隼人・秀吉。あれどう思う？）

秀吉（……………どう考えても演技には見えんのう）

隼人（……………もっと生きたかったな）

明久（隼人、諦めちゃだめだよ!!）

こうなったら明久に全部食わせるか……………

秀吉（ならばここはわしが行こう）

秀吉、なんて勇者なんだ！！

明久（駄目だよ、危険すぎる！！）

隼人（やめろ秀吉！！）

秀吉（大丈夫じゃ。ジャガイモの芽程度なら食べてもびくともせん
のじゃ）

そういえば小っちゃいとき秀吉がカレーに入っていたジャガイモの
を芽を食べてお腹こわしていた記憶があるような……ないよ
うな……

秀吉（安心せい。わしの鉄のライン——胃袋を信じるのじゃ）

隼人（今、鉄のライ。バレルって言いそうになかったか？）

すると屋上の扉が開く音がした。

雄二「おう、待たせたな！へーこりゃ随分美味そうな弁当だなっ」と

そういつて飲み物を買ってやってきた雄二がアスパラ巻きを口
に放り込む。

雄二、お前は最高の友達だ……

パク　　ボタン——ガシャガシャン、ガタガタガタ——ピクピク

秀吉・明久・隼人（（・・・・・・・・アーメン））

島田「ちよっと、どうなってるのよ!？」

遅れて島田がやってきて慌てて雄二に駆け寄る。

すると雄二は俺達に『毒を盛ったな』と目で訴えてきた。

明久が『毒じゃないよ、姫路さんの実力だよ』と目で返事する。

雄二「あ、足が・・・・・・・・攣ってな・・・・・・・・」

姫路を傷つけないように嘘を吐く雄二。

隼人「階段をダッシュで昇り降りしたから足が攣ったんじゃないか？」

秀吉「雄二も慌てん坊じゃのう」

島田「そうなの？坂本ってこれ以上にないくらい鍛えられてると思うんだけど・・・・・・・・」

島田が余計な事を言わないように明久が退場させようと考えているようだ。

明久「島田さん、その手のあたりさ」

島田「ん、なに？」

明久「さっきまで虫の死骸があつたよ」

嘘だけだな。

島田「ええっ！？はやく言いなさいよ！」

明久「洗ってきた方がいいかもしれないよ」

すると島田は手を洗いに行った。島田でも虫が嫌いという女の子らしいところがあるんだな。しかしこれを言ったら命が無さそうなので黙っておこう。

そして俺たちは必死に死なないための作戦会議を始めた……

俺とお昼と召喚獣 中編（後書き）

バイトが休みの時に更新していこうと思いますので次は来週の月曜日になると思います。

誤字・脱字・感想などあったら書いてください♪

あと最近、『Working』というアニメにハマっています♪

以上、アンカフェでした！

俺とお昼と召喚獣 後編（前書き）

どうも、アンカフェです♪

やっとバイトが休みなので更新できます♪でも体育祭が土曜日にあったので筋肉痛で足が痛いです><

それにもうすぐ就職活動とかでいろいろ忙しいし大変ですw

それでは本編です、どうぞ！

俺とお昼と召喚獣 後編

俺たちは己の命がかかった大事な作戦会議をしていた……………

雄二（明久、今度はお前が逝け！）

明久（無理だよ！僕より隼人が逝くべきだよ！！）

なんてこと言いやがるんだこのバカは！

隼人（バカを言うな、俺はまだ死にたくないぞ！）

こんな短い人生で幕を閉じるのは絶対にいやだね。

秀吉（わしもあれを目の当たりにしては決心が揺らぐぞい……………）

揺らがない奴がいたら是非会いたいものだ、そしてついでにこのダークマターを食べてもらいたい……………

隼人（じゃあ、公平にじゃんけんで決めよう）

明久（オーケー、恨みつこなしだからね！）

雄二（負けてたまるものか！）

秀吉（こんなにドキドキする昼食は初めてじゃ……………）

俺だって女の子に告白する前の男の子のようにドキドキしている。
しかしドキドキの種類が違うが……………

隼人（でも、俺が負けた場合――）

明久（負けた場合？）

隼人（一番の奴を憎しみで殺す・・・）

明・雄（恨みっこありかよ！？）

秀吉（隼人も大変じゃな）

そして俺たちの運命のじゃんけんが始まった。

隼人（最初はグー、じゃんけん――）

隼人（ポン（チョキ）！）

雄二（ポン（グー）！）

明久（ポン（グー）！）

秀吉（ポン（グー）！）

ポポポポーーーーン！まさか一発で勝敗が決するとは……………

隼人（……………無念）

雄二（隼人、頼んだ）

明久（やっぱり言いだしつぺが負けるんだね）

秀吉（頑張るのじゃ）

くそ、何故だ！まさかほんとに俺が負けるなんて……こうなったら意地でも生き残ってやる！！

隼人「姫路」

姫路「なんですか隼人君？」

隼人「明久達はお腹いっぱいからあとは俺が全部食べるわ」

姫路「そうなんですか、はいそうぞっ」

そうやっておれはダークマターを手にして一気に食べつくす！

雄二（どうだ？）

明久（大丈夫？）

秀吉（隼人……）

隼人「なんだ、みんなが言うほど不味くは——（ボタン）」

そこで俺の意識は刈り取られた……

明・雄・秀（（アーメン））

ここはどこだろう？俺のまえに広がるのは三途の川のような——つて三途の川じゃんここ——！

隼人「やべーよw」

???「あら、隼人じゃない？」

隼人「ん？お、おばあちゃん！？」

そこには20歳代に若返ったおばあちゃんがいた。

隼人「なんでそんなに若いんだよ!？」

おばあちゃん「それがね、地獄めぐりツアーを回っていたらいつの間にかこんなに若返っていたのよ」

なんでもありだな、ここ。

隼人「俺、現実の世界に帰りたいんだけど・・・」

おばあちゃん「それなら閻魔ちゃんに頼んで帰してもらおうかしら」

隼人「閻魔ちゃん!？」

おばあちゃん「あたしね、閻魔ちゃんと気が合って毎日晚酌してるのよ」

あらためておばあちゃんの凄さが思い知らされる。高校の時の写真を見せてもらった事があつたけどかなり美人だったもんなw

おばあちゃん「閻魔ちゃんに連絡したからすぐ返してもらえるそうよ」

隼人「よかった・・・」

おばあちゃん「今度は友達連れて遊びに来てだつて」

誰がわざわざ死にかけてまで遊びに来るか!!

おばあちゃん「時間みたいだね、またね隼人」

隼人「もう来ねえよ！」

そうして俺は現実の世界に戻った。

目が覚めると俺は教室で寝ていた。

隼人「……ここは教室か？」

雄二「そうだ隼人、よく帰ってきた」

明久「隼人が倒れた後、姫路さんのデザートを食べさせられそうになって大変だったよ」

隼人「俺はむこうで20歳代に若返ったおばあちゃんに会った・・・」

秀吉「戻ってこれてよかったのう」

今度から胃の方も鍛える必要があるな・・・

雄二「さっそくで悪いんだが俺たちはBクラス戦の準備をしようと思う」

隼人「そうか、それなら回復試験を受けないとな」

そして雄二が教卓に上がり、みんなに指示をする。

雄二「聞いてくれ、次のBクラス戦のために回復試験を受けてもらう。みんな頑張ってくれ」

Fクラス「「「おおー！」「」」」

そうしていよいよBクラス戦が始まるうとしていた・・・

俺とお昼と召喚獣 後編（後書き）

グダグダになってすみませんゝ< ネタが思いつかない・・・

次の更新は月曜日になると思います♪

誤字・脱字・感想などあったらどんどん書いてください♪

以上、アンカフェでしたゝ

俺とFクラスと戦争開幕（前書き）

どうも、アンカフェです！

短くはなってしまいましたが更新がやっとできます^^

それでは、本編です。どうぞ！

俺とFクラスと戦争開幕

雄二「皆、総合科目のテストご苦労」

俺たちは午前中テストを受けていた。たつた今総合科目のテストが終わったところだった。

しかしこうもテストばかりだと気がめいるな。

雄二「午後はいよいよBクラスとの戦争だ。みんな思う存分殺つて来い！」

Fクラス「「おっしゃー！」「」」

一気に上がるモチベーション。このクラスの唯一の最強武器だな。

雄二「今回の戦争は敵を教室に押し込むことが重要だ！なので開戦直後の渡り廊下戦は絶対に負けるわけにはいかない！」

Fクラス「「おおー！」「」」

雄二「そこで前線の指揮を姫路に取ってもらう」

姫路「一生懸命頑張ります！」

姫路もやる気満々みたいだ。うんうん、これならBクラスにも勝てるかもしれないな。

雄二「みんな、頑張ってくれ！」

Fクラス「おおおー！」「」

雄二「・・・・・・・・・・ところで隼人」

すると集中していた俺に雄二が話しかけてきた。

隼人「なんだ雄二？今集中していて忙しいんだが？」

雄二「そうか、それはすまない。ところでいったい何をしているんだ？」

何をしているんだって？それはもちろん・・・

隼人「モ。ハン」

雄二「作戦会議中にモ。ハンするな！！」

怒られてしまった・・・・・・・・アルバ中だったのに。

隼人「いや、すまない。ついやりたくなってしまって・・・」

明久「ちよつと隼人！僕のところに来ちゃったよ！！」

すると雄二が呆れたように明久に問いかけた。

雄二「・・・・・・・・明久、家に帰ってからやってくれ」

そんなこんなで作戦会議が終わり・・・

キンコーンカーンコーン

昼休み終了のチャイムが鳴りいよいよBクラス戦開幕だ！

雄二「いよいよBクラス戦だ！準備は良いか野郎ども！！」

Fクラス「ばつちこい！！」

隼人「明久、回復薬忘れてるぞ？」

明久「あ、ほんとだ！気を付けないと」

雄二「お前らいつまでやってるんだ！？」

いやゝ止められない止まらないだな。

雄二「いいかお前たち、目指すはシステムデスクだ！」

Fクラス「うつしゃあー！！」

雄二「Fクラス、出るぞ！」

Fクラス「イエス、マイロード！」

そうしてBクラス戦が始まった…………

F「Bクラスの奴らを発見したぞ！」

F「高橋先生を呼んで来い！！」

正面からゆつくりとBクラスの連中が歩いてくる。余裕氣取っているよだな

B「Fクラスなんかひねり潰してしまえ！」

Bクラス 野中長男 総合 1943点

VS

Fクラス 近藤吉宗 総合 794点

力の差は歴然だった……

Bクラス 金田一裕子 数学 159点

VS

Fクラス 武藤啓太 数学 69点

Bクラス 里井真由子 物理 152点

VS

Fクラス 君島博 物理 77点

圧倒的な力の差の前に次々とみんながやられていく。

覚悟はしていたがこれほど差があると少々きつい。止めを刺される前にフォローに入らないと戦力が激減してしまう。

隼人「科学や数学だと俺は結構不利だからな」

すると向こうから息を切らせながら走ってくる1人の少女が見えた。

俺とFクラスと戦争開幕（後書き）

最近、台風の影響で電車とかが止まったりして大変です><

いつそ学校休みになればいいのに・・・ってそううまくはいかないんですよw

次の更新はまだ未定ですw

誤字・脱字・感想などあったらどんどん書いてください！

以上、アンカフェでしたゝ

俺とBクラスと試召戦争 前編（前書き）

どうも、作者です！

学校に行く前に少し更新しておこうと思います。

それでは、どうぞ♪

俺とBクラスと試召戦争 前編

「やばい、Fクラスの姫路瑞希だ!!」

Bクラスの誰かが叫んだ。向こうから走ってきていたのはやっぱり姫路だった。

「……それにしても走るたびに大きく揺れるあの乳は実にけしからん!!」

姫路「す、すみません……。遅れ……ました」

姫路は元々体力がある方ではないので息を切らせながら走ってきていた。

明久「姫路さん、さっそくで悪いんだけど……」

姫路「わ、わかりましたっ、行ってきます!」

そういつて戦場の中に紛れ込んでいく姫路。その姿をみて明久が幸せそうな顔をしている。

「長谷川先生、Bクラス岩下律子です。Fクラス姫路瑞希さんに数学勝負を申し込みます」

姫路「あ、長谷川先生。姫路瑞希です。宜しくお願いします」

さっそく勝負を挑まれる姫路。しかし姫路の点数なら負けることはないだろう。向こうも少し警戒しているようだ。

「律子、私も手伝う！」

するともう一人Bクラスから援軍が来た。少しではなくかなり警戒してるようだ。まあ、それも当然なんだけどな。

『サモン試獣召喚！』

呼び声に応じて魔法陣が形成され、みなさんおなじみの召喚獣が顔を出す。

敵の召喚獣は剣と槍、対する姫路は召喚獣の身の丈以上の大剣を軽々と持っている。

3人の召喚獣は似ているが一つ違うことがある。それは・・・

明久「あれ？姫路さんの召喚獣、きれいなアクセサリをしているんだね？」

姫路「あ、はい。今回数学は結構解けたので・・・」

たしか400点以上取ると召喚獣に腕輪がついて特殊能力が使えるんだったよな。

それならこのバトル、勝負ありだな。

「そ、それって・・・」

「私たちが勝てるわけじゃないじゃない！！」

勝ったら奇跡だな。

姫路「じゃ、行きますー！」

そうやって姫路の召喚獣が相手に向かって腕輪のついている左腕を突き出す。

「こうなったら、律子を盾に……」

「アンタ何恐ろしいこと考えてるのよ!？」

口論している二人の下に姫路の召喚獣から熱線が放たれた。明久にやったら熱さに悶えるだろうな。

キュボツ!

「きゃあああーっ!」

「律子!」

逃げ遅れた召喚獣が炎に包まれる。

明久「……天照」

隼人「いや、違うから」

『Fクラス 姫路瑞希 数学 412点

VS

Bクラス 岩下律子&菊入真由美 数学 189点&151点』

姫路「ご、ごめんなさい。これも勝負ですので」

そういつてもう一人の召喚獣に大剣を振りおろし一刀両断する。

『岩下と菊入がやられたぞ』

『二人がかりでも駄目なのかつ!?!』

『姫路瑞希、噂以上に危険だ』

『俺はあの胸の方が危険だと思う!』

それに関しては俺も同感だ!

姫路「み、皆さん、頑張ってくださいねっ!」

『やってやれないことはない!』

『姫路さん、サイコー!』

姫路の一言でクラスの士気が急上昇する。ついでに信者も急増中。

隼人「姫路、ここはとりあえず下がってくれ」

姫路「あ、はいっ」

特殊能力を使うと点数消費が大きいので考えて使わないといけない。

俺も自分の特殊能力を使っておいた方がいいな。

『中堅部隊と入れ替わりながら後退しろ、戦死はするなよ!』

とりあえず俺達の狙いは成功だな。相手を徐々に下がらせ、Bクラスに釘付けにするくらいで今日の戦争は終わるだろう。これも大いに姫路のおかげだな。

秀吉「明久・隼人、ワシらは教室に戻るぞい」

明久「ん、なんで？」

俺たちの下にいつの間にか秀吉がやってきていた。

秀吉「Bクラスの代表の根本なんじゃが、なにやら企んでおるみたいなのじゃ」

明久から聞いた話だと『球技大会で毒を盛った』とか『喧嘩で刃物^{デフォル}は当然装備』とか。

そこまで卑怯ではないが用心に越したことはないからな。

明久「なるほど。戻っておいたほうがよさそうだね」

隼人「そうだな、一旦戻るか」

秀吉「雄二のことだから心配ないと思うのじゃが、念のための」

そつやって俺達は教室に戻ることにした……………

俺とBクラスと試召戦争 前編（後書き）

最近、雨が多くて困りますね><

靴下とかびしょびしょですよ！

次の更新はできたら夜に更新したいと思います♪

誤字・脱字・感想などあったらどんどん書いてください！

以上、アンカフェでした！

俺とBクラスと試召戦争 中編（前書き）

こんばんわ！

やっと完成したので更新したいと思います。

それでは、どうぞ♪

俺とBクラスと試召戦争 中編

俺たちが教室に戻ると雄二が険しい顔をして立っていた。

隼人「どうだ雄二。様子は？」

雄二「おう、戻ってきたか。少し教室がな・・・」

教室を見てみるとシャーペンが折られていたり卓袱台が穴だらけになっていたり酷い状態になっていた・・・

明久「・・・うわ、こりゃひどい」

秀吉「ここまでする必要もなかるうに」

隼人「まあ、この程度なら俺は許せるな」

別に俺に被害が無ければそれでいいというのが本音だな。

雄二「いや、隼人。言いにくいんだが・・・アレを見てくれ」

そう言つて雄二が指した方を見える。そこは俺の卓袱台だった。

隼人「別にこの程度で俺は怒らない・・・ぞ」

次の瞬間俺の愛用していたラケットがボロボロになっているのを見つけた。

明久「これは酷いね。別にラケットまで壊す必要はないのに」

秀吉「これは酷いの」

隼人「・・・・・・・・・・・・・・・・」

明久「隼人？ちよつと隼人！？」

雄二「どうした明久？」

明久「隼人の目が赤いんだけど・・・・・・・・」

俺の中で殺したい奴が1人でできてしまった。

隼人「いい度胸じゃないか根本・・・・・・・・殺す」

あいつは俺の手で始末しないと気が収まらない！！

隼人「雄二、悪いが根本は俺にやらせてくれ。あと古典で勝負させてくれ」

雄二「お、おう、分かった。手配しておこう」

見ているよ根本・・・・・・・・！！

秀吉「明久達よ、そろそろ前線に戻るぞい」

明久「了解」。雄二、あと頼んだよ」

雄二「おう、シャーペンと消しゴムを手配しておこう」

隼人「俺は回復試験を受けてくる」

秀吉「では、くれぐれも用心するのじゃぞ」

明久「うん、秀吉もね！」

明久SIDE

須川「吉井、戻ってきてくれたか！」

あれ？部隊は副官の島田さんが指揮してるはずなんだけど。

明久「またせてごめん！戦況は？」

須川「まずいな、島田が人質に取られた」

明久「なぐに！？やっちまったな！」

須川「それ古くないか？」

自分でもなんで言ってしまったのか理解できない・・・

須川「おかげで相手は残り2人なんだが容易に責められないんだ。どうする？」

明久「とりあえず、状況を確認したいな」

須川「それじゃあ前に行こう。そこで敵は道を塞いでいる」

そして前進していると須川君の言う通り2人のB生徒と捕えられた島田さんとその召喚獣が目に入る。

明久「島田さん！！」

島田「よ、吉井！」

悪の組織に捕えられたヒロインを助けに来た主人公みたいだ。

「そこで止まれ！止まらないと召喚獣に止めを刺してこの女を補習室に送るぞ！」

数少ないうちの女子をただ戦死させるんじゃなく、人質にとって補習室送りをチラつかせ、

こちらの士気を挫くつもりか。うまい戦術だ。

たかがこちらの士気程度と数少ない女子……迷う必要な無いな

明久「全員突撃用意いーっ！」

須川「隊長、それでいいのか!？」

戦争に犠牲は付き物!決して日頃痛めつけられているから仕返しをしたいとかそういうんじゃないんだからね!？勘違いしないでよ!

「ま、まて吉井!」

敵から待ったコールがかかる。

「こいつがどうして捕まったとおもっている!？」

明久「バカだから」

島田「アンタ達、そいつを血祭りにあげて!!」

え、なに?どうして味方の島田さんが僕を狙っているの!?

「こいつお前が怪我したって偽情報を流したら、部隊を離れて1人で保健室に向かったところを俺らが捕まえたのさ」

な……ん……だと?

明久「島田さん……」

島田「なによ・・・」

島田さんの顔は若干赤い。

明久「怪我をした僕に止めを刺しに行くなんて・・・アンタ鬼か！？それとも悪魔か！？」

島田「全然違うわよ!!」

恐ろしい。これじゃ保健室で昼寝ができない・・・

島田「ウチがアンタの心配をしちゃいけないの？」

明久「島田さんが僕を心配するなんて・・・」

島田「悪い？」

そういつて顔をそむける島田さん。あの島田さんが僕のことを心配してくれるなんて・・・

「そうとわかったらおとなしく」

明久「総員突撃いーっ！」

「どうしてそうなる!？」

島田「どうしてよ!？」

どうして?そんなの決まっている!

明久「あの島田さんは偽物だ！僕のことを心配してくれるなんて偽物以外考えられない！」

須川「お前はやっぱりバカだな……」

あの島田さんにそんな優しさがあるわけじゃないか！

「おい、こいつは本物だぞ！？」

明久「言い訳なんて見苦しいぞ！」

「だからほんとうに——」

『Bクラス 鈴木二郎 英語W 33点

VS

Fクラス 田中明 英語W 65点』

『Bクラス 吉田卓夫 英語W 18点

VS

Fクラス 須川亮 英語W 59点』

なんだ、2人とも風前の灯だったのか。そうおもって2人の召喚獣に止めを刺す。

「ぎゃあああ……」

「たすけておま——」

そして近くにいた補習担当教師に連行されていく2人。いい気味だ！

明久「みんな気を付けて、変装を解いて襲って来るかも！」

この島田さんモドキめ！

島田「よ、吉井酷い。ウチは『吉井が瑞希のパンツをみて鼻血が止まらなくなった』って聞いて心配したのに・・・」

明久「包囲中止！これ本物の島田さんだ！！」

こんな嘘に騙されるのは彼女以外にいないだろう・・・いや、姫路さんでもあり得るのか？

明久「島田さん、大丈夫だった？」

そいつって座り込んでいる彼女に手を差し伸べる。Bクラスめ、なんて卑怯な手を！！

島田「・・・・・・・・・・」

素直に僕の手を掴み立ち上がる島田さん。

明久「無事でよかったよ。心配したよ？」

島田「・・・・・・・・・・」

明久「疲れていると思うから教室に戻って休憩しよっか？」

島田「・・・・・・・・・・」

明久「それにしても卑怯卑劣な奴らだね、Bクラスは」

須川「仲間を見捨てようとしたお前も同じだと思っぞ」

今のは聞こえなかったようにしよう。命拾いしたね須川君。

明久「え」と、島田さん？」

島田「・・・・・・・・なによ」

こちらを向いてくれた彼女にお礼の気持ちを込めて最高の笑顔を作る。

明久「僕、最初から本物の島田さんだってわかっていたよ？」

お花畑が見えた
・
・
・
・
・
・
・
・

俺とBクラスと試召戦争 中編（後書き）

最近めっきり寒くなりましたね。

私も長袖の準備をしています♪

皆さんも風邪をひかないように気を付けてくださいね^^

誤字・脱字・感想などあったらどんどん書いてください！

以上、アンカフェでした！

俺とBクラスと試召戦争 後編（前書き）

なかなか更新できなくてすみません＞＜

これからなるべく一週間おきに更新していこうと思いますので皆様よろしく願いします！！

それでは、どうぞ♪

俺とBクラスと試召戦争 後編

俺達は殺されかけていた明久を救出して教室で休憩をとっていた。

明久「・・・・ここはどこ？」

隼人「やっと起きたか明久。無事で何よりだ」

姫路「心配しましたよ明久君」

明久「僕はどうなっていたの？」

姫路「まるで誰かに散々殴られた拳句、頭から床に叩き付けられたような怪我をしていましたよ？いくら戦争でも本当に怪我する必要はないんですね」

実際、島田に殺されかけていたけどな・・・・・・思い出すだけで鳥肌が立ってしまう・・・

明久「ちょっといろいろあってね。それで試召戦争はどうなったの？」

隼人「いろいろありすぎたけどな」

秀吉「今は協定どおり休戦中じゃ。続きは明日じゃな」

一応、俺たちの計画通り教室には攻め込んだ。そのかわりに戦力が結構減ってしまった。

明久「ちよつとしたハプニングはあつたけど、今のところは順調だね」

雄二「まあな」

秀吉「隼人は回復試験の方は大丈夫じゃったのか？」

隼人「ああ、俺に任せておけ」

今回はちよつと本気を出したからな・・・根本を地獄に落とすために。

ムツツリーニ「・・・・・・・・・・（トントン）」

雄二「ムツツリーニか。何か変わったことはあつたか？」

話をしているといつの間にかムツツリーニがそばに来ていた。

ムツツリーニ「・・・・・・・・・・Cクラスの様子がおかしい」

雄二「Cクラスだと？」

隼人「まさかあいつ等、漁夫の利でも狙っているのか？」

秀吉「その可能性は高いじゃろうな」

こんな時に漁夫の利狙いとは、いやらしい奴らだな

明久「どうするの、雄二？」

雄二「Cクラスとも協定を結ぶのがいいかもな。他のクラスに攻め

込ませるぞとか言ってやれば攻め込む気もなくなるだろ」

「クラスとの協定も難しくないみたいだな。しかし何か引つかかるんだよね」

隼人「それじゃあ、今から行ってみつか」

明久「善は急げだね」

隼人「よくそんな言葉知っていたな！驚きだぜ！」

明久「隼人、あんまり僕を馬鹿にしない方が身のためだよ！」

いや、実際バカだしな～お前（笑）

雄二「念のために秀吉はここに残ってくれ。顔を見られると万が一やろうとしている作戦に影響が出るかもしれないからな」

秀吉「うむ。承知したのじゃ」

秀吉を残して、俺達はCクラスに向かった。

島田「ちよつと吉井、シャツにアンタの返り血がこびりついて洗うの大変だったんだから」

廊下を歩いている途中で真っ赤なハンカチを持っている島田と、鞆を担いでいる須川にあった。

隼人「いや、別に明久は悪くない……………こともないな」

明久「ちよつと隼人！そこは僕を庇うところだよね！？」

だつてお前の言動が引き金でもあるしな

明久「それより島田さんに須川君、ちよつとCクラスまで付き合つてよ」

明久のやつ、自分の身代わりにする気だなw

島田「別にいいけど」

須川「俺も構わないぜ」

ほら、盾をゲットしたような顔をしてやがる。

雄二「Fクラスの坂本雄二だ。このクラスの代表はだれだ？」

雄二が教室に着くなりCクラスにいた全員に問いかける。

「私だけど？」

そうつて出てきたのは気が強そうな女子。たしか小山？だったかな

雄二「クラス間交渉に来たんだが時間はあるか？」

小山「クラス間交渉？ふゝん」

小山は不敵な笑みを浮かべる。なにか企んでいるような顔だ。

雄二「ああ、不可侵条約を結びたい」

俺は教室を見まわしているあることに気づいてしまった。

隼人「雄二、その話はマズい！」

雄二「ん？」

小山「不可侵条約？・・・どうする根本くん」

根本「当然脚下に決まっているだろう？」

明久「根本君！？どうして君がCクラスに！？」

教室には根本の他に少数のBクラス生徒、数学・現国の先生がいる。

隼人「たぶんコイツら付き合っている」

須川「殺せー！！！」

隼人「まで、ここは俺に任せてくれ。どうせこいつらは『試召戦争に関する一切の行為』を盾にしらを切るに決まっている」

雄二「くっ、すまない隼人！明久、ここは一端引くぞ！」

明久「死なないでね隼人！」

そういつて明久たちは戦場から離脱していった。

隼人「島田と須川、すまないが数学勝負は任せていいか？」

島田「分かったわ」

須川「任せとけ！」

さうと、いっちょやりますかな！！

B「相手は所詮Fクラスの屑だ！怖がることはない！」

B「俺たちがFクラスに負けるはずがないよな」

隼人「随分と余裕じゃないの？甘く見ると痛い目みるぜ？？」

B「先生、お願いします！」

そして現国のフィールドが形成された。それに応じて4人が召喚獣を召喚した。

隼人「試獣^{サモン}召喚」

Fクラス 紅月隼人 現代国語 457点

B「なに！400点越えだどつ！！」

隼人「だから甘く見るなよって言ったじゃないか」

さてと、久しぶりにアレを使うかな。

隼人「無我の境地」

キーワードを言うと俺の召喚獣の周りをオーラが纏った。

隼人「無我の境地は今まで俺が戦ってきた選手の技を無意識に出すというものだ。たまに危険なものが出るときもある」

そして相手の召喚獣目がけてボールを打つ。

B「なんだこの球は!？」

B「ちょっ、うわああああ」

そして一気に戦死するBクラスの奴ら。誰が『俺たちが負けるわけではない』だと？笑わせるぜまったく・・・

隼人「今のは波動球だな」

そろそろ島田たちも交戦に入るな。俺は明久達に合流するでしょう。

明久「あー、疲れた」

隼人「雄二、そっちは大丈夫だったみたいだな」

雄二「ああ、何とかな。隼人、さっきは助かった」

隼人「気にするな」

俺達はなんとか合流して教室でミーティングを行っていた。

島田「ふんっ！」

明久「し、島田さん。僕が何か・・・？」

島田「（キッー！）」

明久「み、美波・・・」

いつの間にあいつ等仲良くなったんだ？俺と別れた後何かあったみ

たいだな。

雄二「さて、お前ら。こうなったからにはCクラスも敵となった。同盟戦が無いためBクラス戦の直後にCクラス戦はさすがに無理だ」

仮にBクラスに勝ったとしてもこちらの消耗はかなりやばいはず、そこにCクラスとの戦争となると勝ち目は俺達にはない。

明久「このまま勝ってもCクラスに横取りされちゃうよ？」

秀吉「そうじゃな・・・」

雄二「心配するな」

隼人「何か考えでもあるのか？」

雄二「まあな、その作戦は明日の朝実行する。俺に任せておけ」

そして俺達は解散して、続きは翌日へと持ち越しになる。

雄二「昨日言っていた作戦を実行しようと思う」

登校してきた雄二が開口一番にそう告げた。

明久「開戦時刻はまだだよ？」

現在の時間は8時半、開戦時刻は9時だ。

隼人「その作戦はCクラスに行うのか？」

雄二「そうだ隼人。そして秀吉にこれを着てもらおう」

そういつて雄二が鞆から出したのは女子の制服だった。

隼人「まさか雄二、お前にそんな趣味があつたなんて……………」

雄二「まて隼人、これは知り合いに借りただけで俺に女装の趣味はない!!」

そういうことにしといてやろう……………うん。

明久「雄二、前々から薄々は気づいていたけど……………」

雄二「表へ出る、明久」

明久「何で僕だけ!？」

秀吉「別にわしは構わんが女装してどうするのかのう?」

秀吉が女装・・・・・・・・・・ってまさか！？

雄二「秀吉には姉の木下優子として、Aクラスの使者になってもらう」

ばれたら秀吉は処刑だな。

雄二「と、いうわけで「どういうわけ？」秀吉、さっそく着替えてくれ。あと明久、覚えておけよ」

明久「何で僕！？」

ドンマイ明久♪

秀吉「う、うむ・・・・・・・・」

そして渡された制服を着ていく秀吉。本当に女にしか見えないよな・
・・・

俺とBクラスと試召戦争 後編（後書き）

最近、朝が寒くなって大変ですね！

ところで皆さんはシュタインズ・ゲートというアニメを知っていますか？

あれにかなりハマってしまってゲームまで買ってしまったww

興味があれば皆さん一度見てみてください^^

以上、アンカフェでした！

俺と決着と召喚獣（前書き）

どうも、やっと更新することができました！

結構焦って書いたので誤字脱字目立つかもしれません><

それでは、どうぞ！

俺と決着と召喚獣

秀吉に着替えてもらった後、俺達はCクラスの前まできていた。

雄二「それじゃあ、秀吉頼む」

秀吉「うむ、行ってくるのじゃ」

そして秀吉は教室の扉を勢いよく開く。

秀吉「この、薄汚い豚ども!」

開口一番に罵倒かよw Cクラスの皆が驚いて棒立ちしてるしw
そのCクラスの中から代表の小山が睨みながら歩み寄ってきた。

小山「ちょっと、いきな——」

秀吉「話しかけないでくれるかしら? 家畜の匂いが伝染するじゃないの」

うつるわけないだろ常考w

雄二「さすが、秀吉」

明久「これ以上ない挑発だね」

隼人「挑発の域を超えている気がするんだが……」

秀吉の罵倒に小山は火山のように真っ赤だ。

小山「あんたAクラスの木下よね？ちょっと頭がいいからって調子に乗らないでくれる！一体何の用よ！」

秀吉「私はごみ溜めのCクラスに文句があつてきたのよ、こんな家畜が集まっているクラスが同じ学年にあるなんて我慢できないの。ただでさえ廊下の前を通るだけでも嫌なのに」

ひどい言いようである。

小山「私たちよりクズのFクラスの方がごみ溜めじゃないの！？私たちはそこまで落ちぶれてはいないわ！」

隼人「俺らすごい言われようだな」

雄二「ま、お互い様だな」

秀吉「近いうちに始末してあげるからそれまでゆっくり待っていないなさい！」

そうして俺達はCクラスを後にする……………

明久「これでCクラスは大丈夫だね」

雄二「ああ、秀吉よくやってくれた」

隼人「秀吉、これから大変だな」

秀吉「??」

秀吉は訳が分かっていないようだ

隼人「優子にバレたら殺される……………」

秀吉「……………」

雄二「それじゃあ、そろそろ俺達もBクラス戦の準備を始めろ！」

戦争開始まであと10分、俺達はいそいでFクラスへと向かった。
向かう途中、秀吉の顔が真っ青だったのは気のせいだろう……………

秀吉「ドアと壁を使うのじゃ、戦線を拡大させてはならぬぞい！！」

秀吉の指示が聞こえる。

教室に戻り準備をしたところでBクラス戦開始となり、俺達は昨日中断されたBクラス前という位置から進軍を開始した。

雄二が言うには『敵を教室内に閉じ込める』とのこと。
すると後ろからムツツリーニが話しかけてきた。

ムツツリーニ「・・・隼人、根本は自分の周りに6人の護衛をつけている」

隼人「そうか、その程度なら問題ないな。ムツツリーニ、悪いが古典で勝負できるように手配してもらえるか？」

ムツツリーニ「・・・（コクリ）」

隼人「今度また気に入りそうなエロ本を持って来よう」

ムツツリーニ「俺に任せておけ（グッ）」

さて俺は教室に戻るかな、明久たちは大丈夫だろうか？

明久SIDE

「古典の戦力が減ってる、応援を頼む！！」

Bクラスは理系より文系の方が多から古典となるとこちらが不利になる。でも元々Fクラスの皆は全部ダメだけど・・・

明久「姫路さん、左側の援護をお願い！」

姫路「あつ、そ、その・・・」

ん？姫路さんの様子がおかしい・・・まさか具合でも悪いとか？姫路さんは元々体が弱いから心配だ。

明久「姫路さん、具合でも悪いの？」

姫路「いえ、そういう訳では・・・」

やっぱり様子が変わだ。戦線にしながら泣きそうな顔でオロオロしている。このままじゃ突破されちゃう！

明久「だあああ！」

掛け声とともに僕は戦線を駆け抜け、古典の竹中先生のところに行き耳元である言葉をつぶやく・・・この言葉は竹中先生に効果抜群だ！

明久「・・・先生、ヅラがずれてますよ？」

その言葉を聞いた途端、竹中先生が顔色を変えて自分の髪の毛（偽）を抑える。

竹中「せ、先生は急用を思い出したのでこれで失礼します！！」

よし、竹中先生の排除に成功だ。しかしここでいざという時の為の脅迫ネタ（古典教師編）をつかう羽目になるなんて思わなかったよw

「左側出入り口が古典に変更されたぞ!!」

「数学教師は!?!」

「Bクラス側に拉致られた!」

まずい、このままじゃどんどん不利になってしまっ!

姫路「わ、私が行きます!.....あ」

しかし姫路さんは走るのを途中でやめてそのまま俯いてその場に立ち尽くしてしまう。

そして姫路さんは上の方を見つめて今にも泣きだしそうな顔になる。

姫路さんの視線を追ってみるとそこには.....腕を組んでこちらを見下ろすクス野郎——根本君がいた。

明久「もしかして姫路さん、根本君になにかされたんじゃない.....」

ここからは醜いけど.....いや見にくいけど目を凝らして根本君を観察する。すると.....

明久「あっ!!」

根本君の手を見てみるとそこには手に入れようと思えば普通に手に入る、しかしお金をいくら出しても手に入れることができないものがあつた。

彼が手にしていたもの。

それは姫路さんが放課後にかいていたあの恥ずかしがって教えてくれない封筒が握られていた……………

明久「そうか、そういうことか……………」

これで姫路さんが戦闘に参加しないで泣きそうな顔をしていた理由もわかった。

明久「姫路さん、具合が悪いなら教室で休んでるといいよ、無理はしないで」

姫路「え……………」

明久「僕はちょっと用事が出来たから行くね？」

姫路「あつ……………!!」

面白いことしてくれるじゃない根本君。こんな作戦で姫路さんを使えないようにするなんて……………

明久「あの野郎、絶対ブチ殺す！」

そして僕は急いで雄二がいる教室に戻る。

隼人 SIDE

雄二「それにしても隼人……」

隼人「なんだ？」

雄二「なんで、お前この点数のこと黙ってたんだ？」

俺の点数がAクラス並みだというのを雄二には言っていなかった。

隼人「いや、忘れてた」

雄二「最初から教えておけよ！」

隼人「すまんw」

そんな話をしていると勢いよく教室に入ってきたやつがいた。

隼人「どうした明久、なにかあったのか？」

雄二「脱走か？それならチヨキでしばくぞ」

隼人「いや、何か訳ありのようだぞ。それからなんでチヨキ？w」

戻ってきた明久の顔はいつもの間抜け面とはちがって真剣な顔だった。

明久「根本君の着ている制服が欲しいんだ」

隼人「……………明久、とうとう目覚めたか」

明久も開けてはいけない扉を開いてしまったようだな。

明久「ち、違うんだ！これには理由が……………」

隼人「言えない理由か？」

明久「……………うん」

明久の顔が真剣だったのもあるし、明久なりに考え事があるんだろう。それなら黙って信じるのが友達ってもんだな。

隼人「お前が何考えているか知らないが、俺はなるべく協力しよう」

明久「ありがとう隼人」

雄二「まあ、勝利の暁にはそれくらいなんとかしてやるっ」

しかし雄二の顔は『お前がホモ野郎だってことは前から知っていた』みたいな顔をしているw

雄二「で、それだけか？」

明久「あと、姫路さんを戦線から外してほしいんだ」

雄二「なぜだ？」

明久「理由は言えない」

根本と姫路……、まさか姫路が根本に何かされたんじゃないだろうか？

まあ、これは考えすぎだな。

雄二「それは、どうしてもか？」

明久「うん。お願い雄二！」

明久が雄二に真剣にお願いする。

雄二「分かった。だが条件がある」

明久「条件？」

隼人「まあ、姫路がやる役割を代わりにお前がやれってところか？」

雄二「ああ、隼人の言う通りだ。いけるか？」

明久のことだから全力でやり遂げてくれるだろう。バカと鉄は使い用だな。

明久「もちろんだよ！で、何をすればいいの？」

雄二「タイミングを見計らって根本に攻撃をしかける。科目はなんでもいい」

明久「みんなのフォローは？」

隼人「ないだろうな」

雄二「ああ。あとBクラスの出入り口の状態は今と変わらない」

明久にはきつい仕事になることは間違いない。しかしこれに成功すればBクラスに勝利する確率が格段に跳ね上がる。いや、勝てるといってもいいだろう。

明久「もし、失敗したら？」

雄二「失敗のことは考えるな。必ず成功させる」

明久「わかったよ」

雄二「じゃ、頑張れよ」

そう言つて雄二は教室を出ようとする。

明久「どこいくの雄二？」

雄二「俺は例の件でDクラスに話をしてくる」

例の件とはBクラスの室外機の事だろう。

雄二「明久、お前は点数は低いが行動力は誰よりも優れていると思う。だから俺はお前を信じる」

明久「うまくやってみせるよ」

そういいのこして雄二は教室を出て行った。
そして明久も作戦を思いついたのか島田と武藤と君島をつれて教室

を出て行った。

隼人「さてと、俺も準備体操でもしておきますかな」

明久 SIDE

「二人とも本当にやるんですか？」

僕は今、思いついた作戦を実行に移していた。

明久「もちろんですよ」

島田「このバカとはいつか決着をつけないといけないとおもっていましたから」

向かい合う僕と美波。

場所はDクラス、周りはFクラスのみんな。

遠藤先生からみたら状況が分からないといったところだ。

島田「こいつは『観察処分者』ですからFクラスで勝負なんてしたら教室が壊れるかもしれないので」

「考え直す気はないんですか？」

明久「彼女には日頃のお礼もしないといけないので」

そして大きく深呼吸をして、キーワードを口にする。

「サモン試獣召喚」

明久「いけ！」

木刀を強く握りしめて美波の召喚獣に切りかかる。

島田「当たらないわよ！」

しかしそれは美波の召喚獣に躲されて後ろの壁に攻撃が当たる。

ドンッ！

明久「ぐっ！！」

フィードバックで衝撃が走る。

今度は拳に力を入れて殴りかかる。

しかし、モーションが大きいのでこれもたやすく躲されてしまう。
そして、壁を殴りつけた衝撃がフィードバックする。

ドンッ！

明久「——んのおっ！」

さらに力をこめて再び殴りかかる。しかし横っ飛びにかわされ、こちらの拳もまた壁を殴る羽目になる。

ドンッ！

再び激痛が走る。

島田「アキ、時間がないわよ！」

美波が時計を見て告げる。

現在の時刻は2時57分。タイムリミットはあと3分しかない。

根本「お前らいい加減諦めろよ、無駄なあがきだぜ？」

遠くからBクラスのクズの声が聞こえてくる。

雄二「ふつ、軟弱で卑怯なBクラス代表さんがそろそろギブアップか？」

姫路さんを使えなくしたことによって安心しきっているんだろう。

明久「らっあ！」

召喚獣を動かす。しかし大ぶりの攻撃は当たらない。その攻撃はまた壁に激突する。

根本「ギブアップ？それはお前たちの方だろうが虫けら」

雄二「無用な心配だなマツシユルム」

根本「頼みの姫路も体調悪そうだったぜ？」

雄二「そうだな、お前が何かしたせいだな」

根本「何のことかわからないな、負け組さん！」

雄二「負け組？それが俺達の事ならもうすぐお前たちが負け組だな」

明久「はあああ！」

四度目の攻撃。

拳の先が温かい、見てみると結構な出血をしていた。床には拳から流れた血で血だまりができていた。

ドゴオツ！！

豪快な音を立てて、Bクラスにつながる道が生まれた。

隼人 SIDE

豪快な音とともに明久が壁を壊して道を作る。あの野郎、ほんとに最高だぜ！！

根本「は、はは、残念だったな！念をいれて近衛部隊を6人つけていたんだ、お前らの奇襲は失敗だ！！」

取り繕うように不細工な顔で笑う根本。

明久「隼人っ！！」

そして明久の声が響く。さて、暴れますかな！

隼人「いくぜ、お前たち。試獣召喚」

「「「試獣召喚」」」

	モブA	モブB	モブC	モブD	モブE	モブF	
古典	120点	115点	131点	106点	123点	11	
8点							

VS

古典 Fクラス 紅月隼人

820点

「『『800点越えだとおおおお!?』』」

隼人「天衣無縫の極み」

そしてキーワードをつぶやく。その瞬間、召喚獣の周りを光が包み込み、オーラを纏とい雰囲気が変わった召喚獣が姿を現した。

古典 Fクラス 紅月隼人 20点

「なんだ、驚かせやがって!点数が下がってるじゃないか!」

「これなら勝てるぜ!」

「ラッキ〜」

こいつらは分かっているようだな。

隼人「天衣無縫の極みは800点の点数と引き換えに発動する技だ」

「ぐわっ!」

そして6人のうちの1人が戦死する。

「『『なにっ!?』』」

隼人「まず、スピードとパワーが格段に跳ね上がる」

「うわああ!!」

2人目戦死。

「攻撃が見えないだと!?!」

隼人「人間の動体視力が追い付けないからな」

そしてツイストサーブを放つ。

「「んなっ!!」」

3・4人目戦死。

隼人「明久、今から打つボールを木刀で真つ二つにしてくれ!!」

明久「りよ、りようかい!!」

そして明久めがけて威力を弱めた球を打つ。その球を明久が木刀で切り上げて真つ二つにする。

隼人「サムライ・ドライブ!」

空中で真つ二つになった球をスマッシュする。

「「来るなああ!!」」

5・6人目戦死。

さて、残るは根本ただ一人。

隼人「さうて、どうするよ負け犬クン？」

根本「くそ、くそ、くそ！なんでこうなるんだ！！」

ラケットの恨みを込めて右腕に力を込めて渾身の一撃を放つ。

隼人「じゃあな、クズ野郎！！」

その一撃は根本の召喚獣を貫通して、根本自身の腹あたり壁に激突する。

Bクラス 根本恭二 戦死

今、Bクラス戦はFクラスの勝利で幕を閉じた

俺と決着と召喚獣（後書き）

どうも、最近忙しい作者です♪

もうすぐ修学旅行も近いので楽しみです！しかし今はテスト期間なので勉強もしないといけません（汗）

誤字・脱字・感想などあったら宜しくお願いします♪

以上、アンカフェでした〜

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0457w/>

バカと紅と召喚獣

2011年11月13日21時28分発行